

384
245



始



H/P-42

384-245

國史の影片



東盛堂藏版

大正
9.9.16
内交

國史の片影 目次

倭寇と李成桂

次 目

一	倭寇の猖獗	一
二	朝鮮の建國	四
三	李成桂我國に好を請ふ	五
四	朝鮮艦隊の襲來	七
五	應永の蒙古襲來は捏造	九
壯絶なる戦役		
一	悲絶壯絶元寇の役	三
一	對外硬精神の發揮	三

二 蒙古の國書……………一四

三 文永の役……………一六

四 逆襲の計畫……………一八

五 弘安の役……………二〇

六 大捷の原因……………二三

七 弘安役の影響……………二五

二 關八州を風靡せる北條早雲……………二七

一 早雲と韭山城……………二七

二 早雲の氣性……………二六

三 堀越御所を滅ぼせる理由……………三三

四 小田原城の攻落……………三六

五 早雲の兩上杉に對する態度……………四〇

六 早雲と公方……………四二

七 韭山根據の理由……………四五

八 早雲の學問と人格……………五三

三 桶狹間の戦ひ……………六〇

一 今川義元と織田信長……………六〇

二 信長の膽力……………六二

三 敵の本陣へ猛進……………六五

四 以奇制勝……………六七

伏見と桃山

一 平安朝時代に於ける伏見……………七〇

二 離宮としての伏見……………七三

三 秀吉時代に於ける伏見……………七五

四 家康時代に於ける伏見……………七六

五 明治時代に於ける伏見……………七九

六 結 論……………八〇

水谷町より發掘せる石垣……………八三

太田道灌の木像……………九〇

通法寺の源氏の墳墓……………九四

賀名生皇居の址……………一〇一

興 亡 史 論……………一〇〇

英雄と豪傑……………一三五

英雄の細心と大膽……………一三五

一 英雄の周到なる計畫……………一三五

二 小事にも極めて細心の注意……………一三六

三 頼朝の機略……………一三七

四 攻戦に地理の研究……………一三九

五 軍事探偵政略……………一四〇

六 古英雄の世界地理研究……………一四二

七 部下の一舉一動に細心の注意……………一四三

八 平素に火急の用意を怠らす……………一四四

九 英雄の細心と大膽……………一四五

織田 信長……………一四七

一 粗暴にして周密……………一四七

二 嚴酷にして寛大……………一五二

三 信長の愛誦した小謠……………一五三

信長の茶の湯……………一五九

一 茶の湯の再興……………一五九

二 茶器と茶入……………一六〇

三 武の半面に風流……………一六一

禪尼の命請……………一六五

一 馬上十三歳の頼朝……………一六五

二 雪路に迷ひ込む……………一六八

三 青幕の驛の奇遇……………一七一

四 夜叉御前の投身……………一七五

五 頼朝の死罪……………一七七

六 池の禪尼の慈悲……………一八〇

幕末英傑阪本龍馬……………一八四

一 龍馬の武術の練習……………一八四

二 二人の刺客……………一八七

三 英雄英雄を知る……………一九一

四 龍馬の最期……………一九四

壯烈なる利通の最期……………一九九

一 口の人より實行の人……………一九九

正倉院御物拜觀に就て

- 二 甲東燒芋の馳走に閉口す……………二〇〇
- 三 刺客を驚ろかす……………二〇一
- 四 偉大なる素志……………二〇五
- 一 正倉院の御物拜觀……………二〇八
- 二 佛教の傳來と其發展……………二一〇
- 三 武家的佛教……………二二六
- 四 寺院と文教の維持は學校……………二三〇
- 五 音樂の發展……………二二三
- 六 聲明の發達……………二二六
- 七 文章變遷の歴史……………二三二

史學の活用

- 八 文體變遷の原因……………二三六
- 九 世界の寶庫たる日本……………二三八
- 史學の研究……………二四二
- 其一 史學と社會……………二四二
- 其二 歴史の盛衰と國家の盛衰……………二四四
- 其三 日本歴史と建國精神……………二四六
- 其四 武家政治……………二五四
- 其五 建武中興……………二五六
- 其六 室町時代……………二五八
- 其七 江戸時代……………二六〇

其八 勤王思想の勃興……………二六二

其九 史學の活用……………二六四

歴史地理の興味……………二六九

一 國民の特質……………二六九

二 國司守護配置の模様……………二七〇

三 諸家の興亡……………二七二

四 諸國港灣の變遷……………二七三

五 各地都會の研究……………二七五

六 道路開通に就いて……………二七六

歴史と國の運命……………二七六

一 歴史と國家との關係……………二七八

二 歴史の盛衰と國家の興亡……………二八〇

三 往昔の國史研究……………二八一

四 北畠卿の神皇正統記……………二八二

五 正統の文字……………二八三

六 國史を基礎とせよ……………二八六

七 國史研究……………二八七

家を重んじたる武士……………二八九

一 家を大切にす國民……………二八九

二 武士の名乗合ひ……………二九〇

三 家の名譽を思ふ……………二九三

四 更に世界に名乗れ……………二九五

史蹟観察法……………二九七

旅行と趣味……………二九七

史蹟観察の準備……………二九八

神社佛閣と文明……………三〇一

豪族と寺社……………三〇四

城址の観察法……………三〇五

支那旅行談……………三〇七

飯能雑記

飯能……………三一一

判乃氏の館址……………三二二

能仁寺……………三二五

智観寺……………三二七

白髭明神社……………三三〇

寶藏寺……………三三一

國史の片影目次終

國史の片影

文學博士 田中義成 著

倭寇と李成桂

(一) 倭寇の猖獗

李氏が朝鮮國を建てたのは、我國民が彼の運命を開くに與つて力があつたのである。此の點から見た彼我の關係は、頗る興味ある問題である。

抑々李氏が勃興したのは何に由つて然るか云へば、倭寇に由つて身を起したのである。

故に先づ當時に於ける倭寇の概況から述べねばならない。我南北朝の末に當

つて倭寇の朝鮮を侵略するものは甚だ猖獗であつた。この頃、朝鮮は、高麗の末期で、衰弱して居つたから、十分に之を防禦することが出来なかつたので、倭寇は益々暴威を逞うして、朝鮮の各道に於ける沿岸の地は、殆ど其慘害を被らざる處はなかつた。

然して辛禰王の二年、即ち我が天授二年に於ける倭寇の如きは、深く京畿道に打入て、最も酸鼻を極めた。

東國通鑑にも、其時の事を敍して數十里の間肅然として人煙なしと云つてある。之がために、高麗の朝廷では其都を深く内地に遷して、倭寇を避けよう云ふ議もあつた位である。

倭寇の慘狀は此の如き有様であつたから、辛禰王の元年、即ち我が天授元年に羅興儒と云ふものを我國に遣して、海寇を禁せられたいといふことを請ふた

時に幕府は足利義滿の時であつたが、此の時義滿は未だ九州でさへ統一の出来ない時であるから、況して海外に渡る倭寇などは、到底取締ることは出来なかつたのである。

乃で辛禰王は、屢々使を遣はして、前請を重ねたけれども、少しも其の効がなく、反て益々激烈になるので、更に鄭夢周といふものを遣して之を請ふた。

夢周乃ち博多に來つて、九州探題たる今川貞世に使命を傳へた。貞世は優遇して之を遣り反したが、倭寇は依然として舊の如くであつた。

其後辛禰王の六年即ち我が天授六年には、一層激烈なる倭寇の襲撃に逢つて益々困難を加へた。

(二) 朝鮮の建國

是に於て、高麗にては、李成桂を大將として、倭寇防禦の衝にあたらしめた處が彼は勇略に富んだ人物で、屢々倭寇を破つたので、倭寇は頗る衰へたが、その代りに、李氏の勢力が倭寇以上に成つて來た。加之、辛禑王は無道にして國政が紊亂せる上に（辛禑王は果して無道であつたか否かは、尙研究すべきである、王の事蹟は李朝の吏が書いたものであるから、全然信する事が出來ない）大臣が黨争を事として、國難を顧ないといふ有様であつたので、李成桂は之に乗じて、兵權を收め、政權を奪つて、遂に高麗の恭讓王の四年我が明德三年を以て、革命を斷行し、高麗朝に代つて、新に國を建て、朝鮮と號した。

即ち今の朝鮮の太祖である。

此に由つて之を観れば、李氏が現今の朝鮮國を建つたのは、前朝に於ける國政の紊亂、大臣の黨争といふ事が、彼に革命の機會を與へたのであるが、彼れに革命の勢力を與へたのは、實に倭寇である。その詳かなる事は、燃黎述室記、高麗史、東國通鑑、朝鮮史略等に見えてゐる。

(三) 李成桂我國に好を請ふ

さて李氏が建國後に於て、我が國に對する態度は如何といふに、彼れが即位の年即ち我が明德三年を以て、僧の覺鑿と云ふものを我が邦に遣はして、好を修めんことを請はしめた。義滿乃ち僧の中津に命じて、答書を作つて之に與へしめた。その書は善隣國寶記に載せてある。其の後も、彼は屢々使者を我に遣

はして、好を通じ、海寇を禁せんことを請ふた。我が應永五年七月に、秘書監朴敦之と云ふものを幕府に遣はして、好を修めんことを請ふた。使者周防の山口に留り、大内義弘が之を接待した。乃で將軍義満は、義弘をして兩國歡を結ぶべき旨を傳へしめ、且鎮西の主將に命じて、海寇を禁すべき旨をも傳へしめた事は、亦善隣國寶記、榎客便覽等に見えて居る。其の後同八年九月に、朝鮮の船が兵庫に來つて、義満が自ら往つて之を見たことがある。此の時、管領斯波義時が之に復書して、大藏經一部を送つてもらひたいと云ふことを請ふた。其復書も善隣國寶記に載せてある。

此の如く、彼は屢々使聘を我が幕府に通じて頗る親善の間柄となつた。然るに一方には、所謂倭寇なるものが矢張り全く絶えないので、彼我が書中にも常に此事を言つて居る。

併しながら、それは我九州沿海の海賊の所業であるといふ事は、彼も承知して居るのであるから、之を以て幕府との平和は破らなかつた、要するに、かの太祖は十分に我が國の武勇を知つて居たから、努めて親善の政策を執つたのである、太宗も太祖について亦同じく好歡を求めたので、兩國の交情は至つて親睦があつたのは、太祖、太宗の政策が宜しきを得たからである。

(四) 朝鮮艦隊の襲來

然るに應永二十六年に當り、朝鮮の艦隊が大舉して我が對馬に襲來したのは如何にも突然であつた、今少しく其の理由を説明せんに、當時朝鮮にては對馬を以て倭寇の巢窟と認めて居つたので、その根本を滅絶せんとして、此の舉に及んだのである。

併しながら當時彼は如何にしてかゝる壯舉を企たかといふに、かの太祖、太宗は、雄才大略があつて、大いに疆土を拓き、國運勃興し當時稱して東海の堯舜といはれた位である。

故に倭寇の主力は一轉して明の海邊へ向く様になつた、けれども猶其の餘波を受けて居たので、太宗は對馬を撃つて之を根絶せしめんと企てたのである。其の動機は、此頃倭寇の大団隊が朝鮮を通過して、明に赴いたので、かの太祖、太宗は群臣を會して、倭寇の歸路を要撃せんことを議した、所が寧ろその虚に乗じて、對馬を伐つて倭寇の根據を絶滅せんと主張するものがあつた。太宗は之を可とし、李從茂といふものを大將として、慶尙、全羅、忠清三道の兵艦二百二十七隻と士卒一萬七千二百八十五人を率ゐて對馬に來寇せしめた。

(五) 應永の蒙古襲來は捏造

此の事が京都に聞えて朝廷、幕府容易ならざる事として社寺に祈禱をさせるなど、頗る騒がしかつた様である、且當時は朝野ともに此の來寇を蒙古軍だと思つてゐた様である。

故に看聞御記に、此時の事を詳記して九州探題の注進狀といふものが載せてある。

それには蒙古高麗が連合して襲來した様に書いてある。此の注進狀は當時の好事者が捏造したものであるから當にはならないが、蒙古が襲來したと云ふ事は當時一般の風評であつたので、斯く書いたものと思はれる。

さて此の注進狀に依ると時の九州探題持範が、九國の兵を發して防戦したと

あるけれども、果して然らば、九州に於ける諸家の文書の内に之に關した文書が殘つて居さうなものだが、未だ之を見ない、且つ此注進狀の署名に探題持範とあるけれども、當時の探題は澁川義俊である、持範ではない。加之、此の注進狀の文體も餘程變なもので、注進狀の態を得てない。故に私は此の注進狀を以て民間の好事者が捏造したものと認める。其れを其のまゝ看聞御記に採録せられたのである。

併し當時世間では、此事をかく誇大に訛傳して、京都の人心まで動搖させたと云ふことは此によつて想像されるのである。

但し續本朝通鑑、大日本野史等には、全く此注進狀を信用して書いてあるから斟酌して見なければならぬ。

此の如く世に所謂應永の蒙古襲來なるものは、其の實蒙古でなく、朝鮮軍で

あつたことは争ふべからざる事實である。去れども其の時の朝鮮政府の意思は倭寇の巢窟と認められたので對馬を攻撃するに止まり、毫も幕府に對して、敵意を挾さんだのではない、それ故に國交に至つては、少しも渝らず、彼我使聘の往來は源々として絶えなかつたのである。

之を要するに李朝の勃興したのは倭寇に起因したのである、言換へれば倭寇がその勃興を援助したのである。その李朝が今日に至つて我が版圖に入つたのは、天運の然らしむるとはいへ、歴史の上から見ると殆んど偶然ではない様に思はれるのである。

故に李朝の勃興と倭寇とは、頗る興味ある問題であるから、其大畧を述べたのである。又應永に於ける朝鮮軍の來襲は普通の史乘には誤つて蒙古軍としてあるから序でに聊か之を辯じたのである。

壯絶なる戦役

(一) 悲絶壯絶元寇の役

一 對外硬精神の發揮

世に所謂「元寇」なるものは、我が邦に於ける一大國難で、夫の元の世祖忽必烈が漢北より起つて支那を一統し、歐洲の一部までも蹂躪した餘勢を以て、我が國を征服せんとしたものである。さればその國勢と云ひ、兵力と云ひ、到底我が邦の敵すべき所ではない。然るに之と戦つて美事に打ち捷つことが出来、剩へ、彼の覬覦の念を断たしめたのは何故ぞ、言ふまでもなく、建國以來の我が對外硬の精神が發揮せられた結果に外ならぬと思ふ、

此精神の發揮に就いて、誰しも知つてゐる極く著しい事實を二つ三つ擧げ

やうならば、夫の推古帝の時に隋に送られた國書に「日出處天子、致書于日沒處天子。」と書せられたるが如き、如何にも雄大なる意氣が現はれてゐる。又天智天皇の時、我が邦は百濟を救けて唐の大軍と戦ひ、衆寡敵せずして遂に軍を撤するの已むを得ざるに至つたが、それにも拘はらず却つて唐より我が邦に和議を申込み、朝廷は之を許されたと云ふことがある。當時天智帝は唐の文明を摸倣せられつゝあつたにも拘らず、毫も之に屈する所なく極力之に抵抗して、却つて彼をして我を畏敬して和議を請ふに至らしめしは、思へば痛快極まる事である。愆くの如きは、皆對外硬の精神より出た事であるが、此の精神は各時代を通じて、一貫してゐるので、元寇の國難に於いても、亦大いに此の精神が發露せられた。併し如何に此のやうな立派なる精神があつても、精神だけでは役に立つものではない。外寇に對する用意と云ふものが無ければならぬ

然るに當時、此の國民的精神と實際的用意と、此の二つのものが十二分にあつたので、彼の様な大勝利を博することが出来たのである。動もすれば此の功績を以て、神風の力に歸するものもあるけれども、決して神風の力ばかりでなく實は大に人力を盡した結果なのである、以下予はその次第を、少しく説明して見やうと思ふ。

二 蒙 古 の 國 書

抑もその使者が國書を帶びて、我が筑前に到つたのは、龜山天皇の文永五年正月であつた。鎌倉幕府は此國書を得て、直ちに之を朝廷に奏したが、諸書に據ると、何れも傲慢無禮の國書であつたので之を卻けたのである。して見ると、彼は我を屬國視したやうな國書でも送つて來たかのやうに思はるるけれども、

國書の原文を見ると爾うではなく寧ろ叮嚀な書き方である。その形式と要點だけを抄出して見ると、

大蒙古國皇帝、奉書

日本國王。(中畧)冀自今以往。通問結好。以相親睦。

且聖人以四海爲家。不相通始。豈一家理哉。以至用

兵。夫孰所好。王其圖之。不宣。

とある。恁くの如く「書を日本國王に奉る」と云ひ、又末尾に「不宣」とあるは、寧ろ叮嚀ではあるまい乎。此の書に依れば、彼は我を一に獨立國と認め殆んど對等の形式を執つてゐたものと思はれる。當り前ならば「日本國王に諭す」とか「告ぐ」とかありさうなものであるが、之に「奉る」とあるのは、彼にしては餘程謙遜の意を示したものである。故に之を一概に傲慢無禮と云ふの

は穩當でない。但し、大蒙古國皇帝の文字を、日本國王より一字高く書いたのは確かに尊大ではあるが、全體の形式は殆んど對等的と見て宜しい。然るに朝廷幕府、共に之を以て無禮の書と見しは、如何なる點であるかと云ふに、その末文に『以至用兵。夫孰所好』とあるこの一語が問題となつたのであらうと思ふ。此の一語は露骨に云へば『汝若し朝貢を肯んせずば征服するぞ』と脅迫したものである。乃で我が朝廷幕府、共に無禮と認めて之を斥け、その使者を追ひ還して了つたのだらう。その當時、朝廷にも幕府にも、却々有識の人が居て、外形の整つた此の國書に瞞着されず、深く内容を看破して直ちに之を斥けたのは、國に其の人ありと謂つて可からうと思ふ。

三 文 永 の 役

是に於てか、彼は大に怒り、盛んに兵艦を造つて日本征伐の準備に取り懸つた。先づ文永六年に再度の使者を遣はして國書を送り、交通を承知せずんば討伐するぞと云つて來た。處が之にも答書を與へなかつたので、同八年にまた使者趙良弼をして國書を齎らして我が國に來たらしめた。併し我は之にも答へなかつた。かくの如く元は前後三度までも、使者を遣はして交通を求めたにも拘はらず、我が邦は斷乎として之に應せず、益々強硬の態度を採つたので、流石の忽必烈もその大膽には驚かされたのであらう。兎に角此の様な次第に彼は大怒つて愈々大軍を起し、文永十一年十月蒙古高麗の軍を合せて、戰艦九百餘艘、兵十萬餘を以て先づ對馬島に押寄せ轉じて壹岐を侵し、過ぐる所悉く慘虐を極めた。是に於てか、九州の諸族競ふて博多に集まり、今かくと敵の來るのを待ちうけた。忽ちにして敵は進で博多に迫つた。果然敵兵來れりと、我

が兵は奮戦して殺傷相當つたが、敵は疲れて、夕暮に船に上つた。偶々大風起つて波濤洶湧し、敵艦悉く碎けて溺死するもの一萬三千五百人、その生き残つた者は吾れ勝ちに去つて、海上また一隻の帆影を見ざるに至つた。

四 逆襲の計畫

愆くの如く、元より襲撃を受けたので、我が幕府に於いては逆襲の計畫を立てた。それは後宇多天皇の建治元年十二月のことで、幕府は異國征伐と云ふ名義を以て、令を九州の諸將に下し、明年三月を以て高麗を征伐をするから、各自所領の田數、兵馬の數を仔細に書き出す様に命じた。乃で九州の諸族は、手々に書き出して、幕府に報じた。その文數十通が今現に石清水八幡宮に残つて居る。その中に肥後國の御家人、井芹彌二郎秀重（法名西向）の注進狀がある

全文は長いから、その一項を抜萃すると、

一人勢弓箭兵杖來馬事。

西問年八十五。仍不能行步。

嫡子越前房長秀年六十五。在弓箭兵杖。

同子息彌五郎經秀年三十八。弓箭兵杖。

腹卷一、乘馬一疋、親類又二郎秀南年十九、弓箭兵杖、

所從二人孫二郎高秀年滿四十、弓箭兵杖、腹卷一領、乘馬一疋。

所從二人

右任御下知狀可致忠勤也。仍粗注進狀言如件。

建治二年壬三月七日

沙彌西向(裏判)

とある、即ち戸主の西向は年が八十五の老人で歩行が出来ない、嫡子の長秀

は年六十五であるが、弓箭兵杖を帶して居るから召に應ずると云ふ意味である。六十五歳の老人で出征を希望すると云ふことは、何と勇しい事ではないか。此の一事を見るも、當時の士氣が如何に振ふてゐたかが分る。併し此の逆襲の計畫は、何か都合があつたと見え遂に實行されずしてしまつたが、此の意氣込があつたからして、弘安四年に於ける再度の襲來にも、打勝つことが出来たのである。此の逆襲の事は、従前の歴史には見えぬが、近年諸家から出た文書によつて始めて發見せられた事實で、國史の上には一段の光彩を添へるものと思はれる。

五 弘 安 の 役

備て愆くの如く、幕府に於いては逆襲の企てがあつた位であるから、秘かに

敵が襲來するだらうと待ち設けてゐた。果せる哉、弘安四年五月に、彼は又もや戦艦九百餘艘兵四萬餘を發して博多に向はしめ、續いて又々戦艦三千五百艘兵十萬餘人が海を蔽ふて到つた。我が兵は、豫ねて期したること故、勇み立ちて之に當つた。我が兵は、敵艦に比べれば木の葉の様な小舟に乗つて猛進し波浪萬丈の海上に奮闘するのだから、迎ても敵ふ道理はないのであるが、其處が即ち日本武士で、巨艦強敵を物ともせず奮進したので、敵兵は頗る利あらざるのみならず、博多附近に築ける石壘の爲めに支へられて上陸する事も出来ず、遂に高島と云ふ島に船がりをした。折しもあれ、颶風大いに起つて敵艦覆没し生き残つたのは這々の體で逃げて了つた。我が兵は之に乗じて鷹島を襲撃し遂に之を全滅した。此の時に於ける我が將士の奮闘ぶりの目覺しかつた事は、手に取つて見るが如く、元寇の繪詞に現れてゐる。此の繪詞は親しく此の役に

参加した竹崎秀長のものしたもので、之れに依つてその當時の有様が歴々として見える。此の原本は唯今では御物となり、畏くも、陛下の御手許に置せられて、常に御愛観遊ばさるゝと洩れ承る。此の繪詞の記事に依つて見ると、如何にして我が將士が小舟に乗つて敵の大船に當つたかと云ふことが知れる。夫の有名人河野道有と云ふ人などは、敵艦を目懸けて進んだ所が、石矢で左の肩を打たれたので、弓を引くことが出来ず大刀を提げて雨霰と降る石矢の間を猛進し、敵艦に近づくや否や檣を倒して之を架し、敵艦に跳り入つて、縦横無盡に斬りまくる、敵の大將らしきものを生擒つたと云ふことである。かゝる記事は此の繪詞の中に幾何も書かれてゐる通り、我が將士は皆かくの如き勇氣とかくの如き働きとを以て、身命を棄て、敵に當つたので、流石の敵も大に困しんでゐたのであるが其處へ恰度颶風が起つて全滅するに至つた次第である。

六 大捷の原因

愆くの如く我が軍が、文永弘安の兩役とも、稀代の大捷を博したのは、決して神風の冥助許りでなく、上下一致して國難に當つた結果に外ならぬ。然らばその事實はどうかと云ふに、畏れ多くも龜山、御宇多兩帝は、宸筆の御願文を伊勢神宮に捧げられ、又た天下の社寺に敵國降伏の祈禱を修せしめた。幕府も亦た諸國の社寺に命じて、異國退治の祈願を籠しめ、西は九州の隅より、東は奥州の果に至るまで、如何なる社々寺々に向ふても、祈禱をせよと訓令したことは、之れに關する文書が各地に現存してゐるのを見ても分る。此の時代には何事にも、祈禱に依頼する習慣であつたから、祈禱に對する信念は絶對のものであつた。されば愆くの如き大々的祈禱は、國民の精神を一統するのに大に力

があつたに相違ない。

併し、必ずしも祈禱に許り依頼してゐた譯ではない。戦鬪の準備、或は防禦の方法等に於いても、十分計畫用意せられたのである。即ち早くも、文永の初年より九州の沿海を警戒し、幕府よりは奉行人を派遣して地方々々の諸家と協議を遂げて防禦の方法を講じ、山陽道方面にも是等の準備を及ぼした。

又博多の沿岸には、石壘を築いたがこれは九州の諸族に夫々身代に應じて工事を分擔せしめた。弘安の役に敵軍が容易く上陸し能はざりしは全くこの石壘のあつたため、これ等の事實もまた現存する諸家の文書が歴々と證明せられて居る。

之を要する元寇に於ける大捷は、神の力と人の力が相俟ち、加ふるに建國以來の特色たる對外硬の精神が遺憾なく發揮せられた結果、彼が如く偉大なる

功を奏したのであると思ふ。

七 弘安役の影響

悉く世界に勇名を轟かせし忽必烈も、日本に對しては外交戦争兩つながら散々に失敗したから遺憾遣る方なく、何うかして日本を征服せんものと、弘安の大敗にも懲りず、更に日本征服の計畫を運したが、我國に於ても又毫も勝ち誇ると云ふでもなく、手を盡して警戒を嚴にし、益々石壘を修めて待ち構へて居たので彼も遂に再舉を果さず、弘安失敗の後十四年を経て、我が永仁二年忽必烈は遂に世を去つた。其の子鐵木耳の代になつても、尙父の志を継ぎ、日本征服の計畫を捨てなかつたが、我も又警戒を怠らなかつた。

既にして我が邦では鎌倉幕府が亡び足利氏が代つて兵馬の權を握るに至つた

が、尙鎌倉幕府の計畫を襲いで、大に石壘を修築したことが、諸家の書に見えて居る。

所が元も亦次第に衰へ、我が正平二十三年に至つて遂に亡んで、新に明が起つた。

明の太祖は又支那を統一して旭日冲天の勢であつたが、其餘勢を以て我國に兵威を及ぼしたかと云ふに、毫もその計畫がなかつたのみならず、却つて遺訓を子孫に垂れて、日本を不征國の中に列したと云ふことが、彼の國の歴史にも見えて居る。

是は全く元の覆轍に鑑て、日本の到底征服すべからざることを知つたからである。然らば則ち文永弘安の兩役は、其の當時に於て偉大なる効果ありしのみならず、永く日本の安寧を維持するに與つて力があつたと云つても、毫も差

間ないと思はれる。

(二) 關八州を風靡せる北條早雲

一 早雲と葦山城

世の中では一般に早雲と云へば小田原城と云ふことをば直ぐ聯想致すやうな譯で、又早雲と云へば常に小田原城に居つたやうに思はれて居るが、併しさうではなく、早雲は終始一生を通じて葦山に居られたのであつて、御承知の通り彼の五代の業を開かれたのも、葦山を根據としての事業であつたのであつて、それ故に早雲は小田原より葦山の方がヨリ以上の深い關係があるのである。それ故に其の事に就いて述べて見やうと思ふのである。併しながら早雲が葦山に於いて爲された事業と云ふものは非常に大きい事であるからして、是れをば一

編の記述ではなか／＼言ひ盡せない次第であるから、極めて概括的に申述べる積りである、先づこれをば凡そ六段ほどに分ける。

二 早雲の氣性

早雲の素性と云ふことに就いては從來種々に説が分れて居て、或は京都の人である。或は備中の人である。或は伊勢の人であると云ふやうになつて居る。併しながら其の中にも京都の伊勢氏から分れて出たのであると云ふのが一番多數を占めて居る説のやうに思はれるのである。そうして早雲は伊勢貞親の子若くは弟と云へる説が多いやうである。併しながら京都の伊勢氏から出たと云ふことは大に疑はしいと思ふのである。何故なれば當時京都の伊勢氏と云ふものは非常に權勢を有して居る人であつて、將軍以上の權力のある人である。其人

の子息或は弟と云ふやうなことであつたならば、當時の公家の日記録などに出て來なければならぬ筈である。然るに毫もさう云ふ證據が出て居らぬからして疑はしい事であると豫て思つて居つたのであるが、果して京都の伊勢氏でなくして伊勢の關氏の一族であると云ふことが明らかになつて參つたのである。これは何で分つたかと云ふと、もとの越前の勝山の藩主小笠原子爵家に所藏されて居る文書の中に早雲の書狀があつた。其の書狀は小笠原左衛門尉と云ふ人に贈つた書であつて、其の書狀の中に早雲自身の出處を書いてある。

「雖未申入候、以次啓候、仍關右馬允事名事我等一體に候、

伊勢國關と申所依在國關と名乗候。

斯う云ふことが書いてあるから、是は伊勢の關氏の一族だと云ふことが是で明瞭になつたのである。併しながら諸書何れも京都伊勢氏の一門であるが如く

書いてあるのは是も強ち理由のない譯ではないと思ふ。何故なれば駿河の今川義忠の側室の北川殿と申す人があつた。此の北川殿と云ふのは何者であるかと云ふと、是が諸書に伊勢貞親の娘と云ふことになつて居る。又伊勢の系圖にもさう見えて居るのである。併しながら此の北川殿なるものは其の實は早雲の妹であること云ふことである。是は宗長手記と云ふ確かな書に見えて居るから明らかに早雲の妹に相違ないけれども、今申す通り早雲は伊勢の關氏の一族であるから、それでは身元が餘り立派でないからして、今川氏が或は京都の伊勢貞親に依頼して貞親の娘になつたのであるから、随つて其の兄なる早雲も伊勢貞親の子と云ふやうな説が出て來たのではあるまいかと思はれるのである。であるから、諸書並に諸系圖に多くは早雲を京都の伊勢氏から出たとしてあるのは斯う云ふ理由なのであらうと思ふ。故に諸書に京都の伊勢氏から出たと云つてあ

るのは疑はしい事ではあるが、理由のあることであらうと斯う考へて居る。サテ其の次に出身はどう云ふ風にして出身したかと云ふに、唯今述べる通り彼の妹が今川義忠の愛妾であるから、其の縁故で彼は今川氏に寓居して居つたのである。所が今川氏の管轄して居る遠江の國に反亂が起つた。そこで義忠は其の反亂を征伐して引き上げて來たが、其の途中に一揆が起つてそれが爲めに到頭討れて了つたのである。そこで今川家に内亂が起つて家中が二つに分れて騒動が始つた。是に於いて堀越の御所からして上杉政憲と云ふ人を遣はし、又扇ヶ谷上杉氏から太田道灌を遣はして其の内亂を鎮定させにやつたのであるけれども、それがなか／＼鎮定しない、然るに早雲の斡旋盡力に依りてこれが平定した。それで早雲が今川氏に勢力を得る端緒となり、遂に子孫が覇を東國に致すの基礎となつたのである。さて義忠が卒去してから其の子の氏親と云ふも

のが家督を相續したが、此の氏親は彼の北川殿の腹に出来た者であるから、早雲の外姪に當る、即ち甥になるのである。そこで早雲は既に内亂を鎮定した上に氏親は未だ幼少であると云ふ所から自然と自分が之を輔佐するやうな地位に立つて来たので、愈々勢力を得る様になつた。併しながら彼の非凡なる經綸は何ぞ區々たる今川氏の一家を治むる位では満足をしなからして、遂に伊豆國を討ち取り、相摸武藏に及んで、終には五代の基を開くと云ふやうな事になつたので、そこで是よりは彼が如何に發達したかと云ふことの事實の大略を次に申さうと思ふ。其の小さい事は略して極く大體だけの事を申す積りである。以上が先づ出身の次第の大畧である。

三 堀越御所を滅ぼせる理由

早雲が堀越の御所を滅ぼした顛末は一切略して、唯々之を滅ぼした理由の一つに就いて私の見る處をば少しく述べて置かうと思ふのである。是れは御承知の通り堀越御所は即ち足利政知の事では上杉氏が關東を統一しやうと云ふ政策からして京都より迎へた者である。それがもう此頃に至つては兩上杉が互に兵を交へて争ふと云ふやうな事になつて、此の堀越御所などは其方退けと云ふやうな有様になつて居たので、御所と云ふ空名を存するに過ぎないのである。加之政知が卒去するに及んで、其子茶々丸と云ふ者が繼母を殺し、或は老臣を誅すると云ふやうな事なごがあつたので、大に堀越御所の内亂と云ふものが起つた。そこで早雲は此の内亂に乗じて茶々丸をば討つて滅ぼして伊豆國を取つたのであるから早雲は正に堂々と親を殺した者を討つた形で、所謂亂

臣賊子を討つたと云ふやうな立派な戦争をやつた事になるのである。けれども其實はさう云ふ立派な事ではない、それは何故であるかと云ふと早雲の此舉は彼の扇ヶ谷の上杉定正と聯合して、やつたものゝやうに考へる。その譯は此頃上杉家が二つに分れて所謂兩上杉となつて、扇ヶ谷の上杉定正と、山内の上杉顯定と互に兵を結んで解けないと云ふ有様である、そうして何れも一方を斃して關東を統一しやうと圖つて居る。そこで上杉定正即ち扇ヶ谷の上杉は、元來今川氏と親しみが深かつたので、此際早雲を自分の味方に引き入れて、そうして上杉顯定に當らうと云ふ企てがあつたやうに思はれるのである。それは新選和漱合符と云ふ書に『早雲入豆相 定正引入』とある。此書は年代記體でその當時に書いたものである。至つて簡單ではあるが、確實なものである。之によれば早雲が伊豆相摸に打ち入つたのは定正が引き入れたのである。それは何故

であるかと云へば伊豆國は山内の上杉顯定の分國であるから、扇ヶ谷の上杉定正は之れを伐たんとして早雲を我が味方に引き入れて、山内上杉の分國たる伊豆に打ち入らせたものと思はれる。であるから假令堀越御所に内亂がなくとも早雲は早晚伊豆國へと打ち入つたらうと思ふ。況んや恰もよし内亂があつたら機逸すべからずとして打ち入つたのであらうと思はれる。斯様な次第であるから早雲が堀越御所を討つたのは上杉定正と申合せてやつた事であると思はれる。併しながら普通の歴史にはさう云ふ内面の消息が分らないから、早雲は獨力を以て伊豆國を討ち取り然も亂臣賊子を誅つたと云ふやうなことに書いてもあり、又論じてもあるけれども、焉ぞ知らん彼の背後には上杉定正と云ふやうな大なる後楯があつたものである。早雲は之を利用して伊豆國を討ち取つて自分の物にして了ひ遂に葦山城に移つたと云ふ次第であるから、此の堀越御

所を滅ぼしたと云ふ理由はごうも早雲の獨力であつたものではない。上杉定正と申合せて討つたのである。左もなければ山内上杉が如何に衰頹して居つた所でなか／＼早雲が獨力で輒く伊豆國を取ると云ふやうなことは出来ることではない、全く扇ヶ谷上杉と云ふ大いなる勢力を藉りてやつたものと思はれる、是が私の堀越御所滅亡に對する意見である。

四 小田原城の攻落

早雲は既に上杉定正と申合せて伊豆の國を取つたので、其の引き續きとして其後は定正の味方として武藏國へ討ち入つて、そうして上杉顯定に屬して居る城々を攻撃して頻りに之を陥れた事が當時の文書に散見して居る。之を以て見ても初めから上杉定正と申合せて居つたと云ふことは分るのである。且つ早

雲が國境を越えてさう無闇に武藏相摸へ討ち入らるべき者ではない。斯く輒く武相に討ち入る事が出来たのは即ち定正の味方となつたからであらうと思ふ。左もなければ輒く小田原を越えて武相に討ち入ると云ふ事は出来ない筈である。況や小田原には定正の部下たる大森氏が居るから、それを無視して武相に討ち入るなぞと云ふことは出来ない話である。畢竟定正とスツカリ聯絡が付いて居つたからこそ早雲は武相に討ち入ることが出来たのである。そうして定正も亦早雲を利用して着々勝利を得たのであるが、早雲の方でも定正を利用して遂に五世の業を開いたのである。斯くして居る中に上杉定正が卒去して、其子の朝良と云ふ人の代となつたが、此の朝良は不肖の子であつて兵威も段々衰へた。乃で早雲は表面は尙ほ朝良を戴いて居るけれども、其實はもう勝手に武藏相摸へ手を入れて最早や獨力でドシ／＼勝手にやるやうになつた。そこで小田原城

をも襲ふて之れを取ると云ふやうになつた。是はもう上杉氏を無視しての事である。會々小田原城主大森氏頼も亦卒去した。氏頼は文武に練達し上杉定正を助けて屢々戦功のあつた人で曾て書を定正に呈して其の驕傲を切諫した事などもあり中々しつかりした人であつた。そこで其の存生中は早雲の方から頻りに懇勸を通じて歡心を求めて居つた。其譯は早雲が關東に出入するの要路であるから常にそれと親睦を保つて居つたのである。併し氏頼と云ふ人は少しも是に油斷をしなかつたと云ふ事である。然るに其の氏頼も定正も同年に卒去したから其の弟の藤頼と云ふ人が其後を繼いだ。所が其人が頗る凡庸の人であつた。上杉定正の子も凡庸、大森氏頼の子も凡庸と云ふので、早雲は益々好機會を得て勝手に武藏相摸を経略することを得たのである。そこで早雲は大森藤頼に益々取り入つて油斷をさして遂に鹿狩に托して小田原を取つたと云ふことである

是より致して最早小田原は自分の手に入つたからして、容易く關東に出入することが出来るやうになつた。是に於いて益々武藏相摸に手を伸ばすと云ふやうな事になつた。そこで小田原には城代を置いて之を守らして、早雲自身は矢張葦山に居つたのである。それは確かな記録並に文書等に依つて明かに徴せられるのである。殊に常に葦山に居つたと云ふことは、甲斐國の妙法寺記と云ふ物に散見して居る。是等に依つて考へて見れば早雲が小田原を取るに至つた理由は上杉定正の卒去と大森氏頼の卒去と云ふ好機會を得たのが動機となつて遂に小田原城を襲ひ取ると云ふことに歸着する様である。併し小田原を取つたならば何故是に在城をしなかつたか、却て葦山に居つたと云ふのはそれはどう云ふ譯であるかと云ふ理由に至つては、別に後で述べる積りであるから、此處では小田原城を取るに至つた事情を述べるに止めて置かうと思ふ。

五 早雲の兩上杉に對する態度

早雲は前申す通り初めは上杉定正の命令の下に武藏相模に討ち入つて上杉顯定に屬して居る城々を攻撃して居つたのであるが。それは前申す通り定正の勢力を利用して自分の地盤を造りつゝあつたのである。それ故定正が卒去してから後と云ふものは、早雲の兵力と云ふ者は日に月に武相の間に振つて來ると云ふ有様で、そこで今度は兩上杉が却つて一致して互に早雲を防禦し様と云ふ態度になつて來た。偶々此時に當つて越後の上杉の老臣長尾爲景と云ふ人……謙信のお父さん……が勃興して、そらして越後の上杉房能と戦つて之に勝つた結果として上杉氏の實權は長尾氏に歸する様になつた。そこで上杉顯定は越後に赴いて爲景を討つた、所が敗北してこれ亦戰死をして了つた。是に於いて早雲

は更に一つの好機會を得たのである。と云ふのは長尾爲景が越後に勃興して、上杉氏に代つて實權を握らうとして居るので、早雲は遙かに之に聯合して、早雲は爲景を利用して關東の上杉を壓し、爲景は早雲を利用して越後の上杉を壓せん、互に利用し合つて上杉に對したのである。そこで早雲は相模の高麗寺及び住吉と云ふ所へ城を築いて是れに楯籠つて、遙かに爲景に應じた。且又上杉の部下たる上田藏人と云ふ人をば誘つて、自分の味方にして神奈川の權現山に楯籠らせた。即ち今の神奈川の臺である。そこで早雲も援兵をやつて權現山をば守らした。

それは何の爲めであるかと云ふと、段々と上杉朝良の居城である江戸城に押し詰めやうと云ふ企みなのである。そこで上杉朝良は江戸の方にまで押し寄せて來られては堪らぬと云ふので自ら兵を率ゐて權現山を攻めた。其の結果權現

山が落ちたので早雲も一時據むなく朝良と媾和をして互に兵を收めたけれどもそれはホンの一時的の媾和であつて、此後も益々上杉氏に肉薄をしたのである即ち彼の勢力は江戸城の附近迄確に及んだと見做して宜しいと思はれる、次で早雲は相摸の三浦氏を滅した。此の三浦氏は鎌倉以来の大族で、而も上杉氏に屬して居る。そこで早雲は是をば滅して然る後に江戸城に及ばんとしたのであつて、そこで上杉朝興（朝良の子）は自ら兵を率ゐて三浦を助けやうとして参つたが、是も途中で遮られて、敗北して江戸に引き上げて了つた。是よりして上杉氏は益々早雲に追ひ詰められた。さて早雲は三浦合戦の勝利をば祝するために、自分の刀をば三島神社に奉納した。今に三島神社に残つて居る筈である又之に添へて寄進状も残つて居るだらうと思ふ。

斯の如く早雲は上杉氏に對しては、江戸の附近迄追ひ詰めたので、此後氏綱

氏康の代を経て、氏康の時に至つてトウ／＼上杉氏と云ふものは全く追跡を關東に絶つて了つたのは、全く早雲が江戸附近まで攻め詰めて置いたのが土臺となつて關東を統一することが出来たのである。されば兩上杉を滅するに至つた基礎は既に早雲の時に出来て居ると申しても宜からうと思ふのである。

五 早雲と公方

早雲は次第に上杉氏を追ひ詰めたが、關東公方と云ふ者を奉戴しなければどうも關東を統一することはむづかしいと云ふことを知つたと見えて、更に一步を進めて今度は關東公方たる足利政氏を擁して上杉氏に當らうといたして、政氏に接近して、そうして上杉顯定を政氏に讒して曰ふには、彼は公方に對して異志を蓄へて居るものであると云ふ事を申した。併しながら政氏は容易に之を承

知しないのであつたけれども、政氏の息子の高基は早雲に同心して政氏に勸めて顯定を除かしめんとした。けれども政氏は尙ほそれを聽き入れなかつた。そこで政氏と高基と親子の間が不和になつて、遂に父子互に兵を交へるやうなこゝとなつた。そうして高基は早雲を助けて共に上杉氏を傾けやうと云ふ企てをした。是に於いて關東の諸族も二つに分れて或は政氏方となり、或は高基方となる云ふやうな工合になつて頗る混亂の有様を呈した。

随つて往々款を早雲に送る者がある、と云ふやうな形勢になつた。そこで此の公方同士の争ひが早雲の死後まで續いたが、遂に和睦して政氏は隱居するこゝになつて高基が公方になつたのは即ち早雲の勝利に歸したのである。所が高基の子の晴氏は又もや上杉氏に心を寄せたので、上杉氏は晴氏を擁して親の高基を攻めたが、北條氏康は晴氏を攻めてトゥク之を降して遂に晴氏の子の義

氏を立て、關東公方とした。此の義氏の母は北條氏綱の娘であるので、是に於いて關東公方と云ふものは北條氏の外孫に歸して了つた。そこで北條氏は之を奉じて關東に號令すると云ふやうな事になつた。名實共に關東の覇權は北條氏に歸するに至つたのである。是れ全く早雲の計畫した公方擁立の策が是に至つて完全に其の目的を達したのである。

六 葦山根據の理由

早雲以前に於ける葦山の歴史と云ふものは、ごうも慥かなものは未だ見當らない。併し此の土地の御方は却つて御承知かも知れない。私の今日まで見る所では何うも確かなものがない。唯々小田原記に依ると此の葦山には北條と云ふ人が居つて、早雲の親族であつた。所が此の人が病死して子がなかつたので、

北條の一門が堀越御所に願つて、早雲養子とした。そこで早雲は駿河の興國寺と云ふ城から葦山に移つた。彼が北條と稱するものも此の縁故であると云ふ事が書いてある。又北條五代記に依れば葦山には堀越御所の家來の富山豊前守と、云ふものが居つたが、讒言に依つて誅せられた。是に於いて早雲をば興國寺からして、堀越御所に呼び寄せて、そうして葦山に在住せしめたと斯うある。又北條盛衰記にも五代記と同様な説が書いてある。

但し早雲が北條と稱したのは、其の母が北條高時の末女横井掃部助と云ふもの、娘であつた。それで母方の苗字を名乗つて北條と云つた。斯う云ふ事が書いてある、また横井系圖と云ふ物が世に傳はつて居るが、此の中にも其の説が書いてある。また五代記に早雲は北條に居つたから北條と稱したとも書いてある。斯様な譯では等の書物は何れも確信する譯には行かぬので暫らく唯々列擧

するに止めて置く。併しながら早雲が堀越御所を攻めたときの事が書いた諸書の多くは、興國寺の城から出發して來て、堀越御所を攻めたと云ふ事が書いてある。

葦山城から出發して堀越御所を攻めたと云ふことは何うも書いてない。して見ると葦山城に移つたのは堀越御所を滅してから後の事であらうかと私は考へて居るのである。併し早雲が自ら北條と名乗つたと云ふことは、今日まで私が見たところの文書並に確かな記録の中には未だ見當らない。皆伊勢とある。北條と書いたものは未だ見ないのである。

さて早雲が此の葦山を根據とした理由は何であるかと云ふと、彼は戦略上何處までも伊豆國と云ふものを根據として、葦山に在城したものと思はれる。之れは幾多の理由があるのである。抑々伊豆國と云ふものは御承知の通り東海

道の咽喉を扼して居る處である。西の方は駿河、遠江等の諸國を制することが出来るし、又東の方面に向つては武藏、相模等の諸國を制御することが出来ることであるから鎌倉時代に於いても、室町時代に於いても、又江戸時代に於いても、伊豆の國は大切に取扱つて居つたものである。されば彼の頼朝も朝廷に奏請して、伊豆國を賜つて之を自分の分國とし、長く子孫に傳へると云ふことにいたしました。是は頼朝自身が伊豆から起つたと云ふ縁故ばかりではなく、前申したやうに此の伊豆國は東海の咽喉を占めて居るので自分の領國にしたのであらうと思ふ。一體關東を守るには箱根を守らねばならない。箱根を守るには伊豆國を守らねばならない。されば伊豆は丁度鎌倉の外堀と云ふやうな位置に當つて居るやうに思ふ、それ故に足利尊氏も初めから非常に伊豆國を大切に居つたやうである。それは常に關東から京都へ往來するのは何時でも三島を通

行するのであるから、若し此の伊豆國が敵の有に歸すると直ぐに往來が杜絶される譯であるから、尊氏は疾くも元弘三年に於いて伊豆の名越の地頭職を自分の外戚にして、最も信任して居る上杉憲房と云ふ人を以て之に補した。次で又自分の參謀とも云ふべき上杉重能を以て伊豆國の守護職に補して、それから又足利基氏が鎌倉管領となるに及んで、其の輔佐たる上杉憲顯を伊豆の守護として其子孫に傳へしめた、之を以て見れば足利氏も如何に伊豆國を大切に居つたか分ると思ふ。徳川家康に至つても亦特に伊豆國を直轄とし、江川氏を以つて代官として世襲せしめたのも、矢張り伊豆國を大切に居つたからであらうと思ふのである。斯の如く鎌倉室町江戸の各時代を通じて歴代の武家が期せずして此の伊豆國を直轄の地として居つたと云ふやうなことは、全く此國が東海の咽喉を扼して居るからであらうと思ふ。それ故に武田信玄が駿河

國を討ち取つた後に、更に伊豆國を取らうとして黄瀬川を渡つて屢々伊豆國へ討ち入つて北條の兵と戦つたことがあるが、是も矢張り信玄が確實に駿河國を占領しやうと云ふのには、どうしても伊豆國を手に入れて置かなければ安心が出来ない、と云ふ所から頻りに骨を折つて伊豆國へ討ち入つたのではあるまいかと思ふ、是等の事實に徴しても如何に伊豆國が武家時代に於いて地理上、政治上大切な國柄であつたのであるかと云ふことが分りはしないかと思ふのである。

早雲が小田原に移らずして始終此の韭山に居つたと云ふのも矢張り其の譯であらうかと思ふ。殊に早雲は今川氏親の伯父に當る人であるから、今川氏を保護する必要の上から言つても韭山に居るのが便宜である。且つ早雲は上杉定正を利用して關東に勢力を發展したけれども、彼は又今川氏をも利用して、自分

の勢力範圍をいたした、故に彼は正面には今川氏を助けて、或は甲斐の武田氏を威壓し、或は三河の松平氏に對抗して今川氏の爲めに防禦の任を盡して居るそれは矢張り自己防衛の爲めである。

そして一面は盛んに武藏相模を經略して關東の統一を圖らうとして居る。斯の如く彼は兩面に對する經綸の策を施しつゝあつたのであるから、それにはどうしても此の東西の兩面の中央に當つて、而も東海の咽喉を扼して居る所の韭山の地を措いて他に適當な所はないと思はれる、是れ彼が韭山を根據とした所以であらうと私は思ふのである。茲に附け加へて申すが太閤が小田原を征伐した時に、此の韭山を北條氏規が守つて居た。所が豊太閤は七人の大將と數萬の軍勢を向けて極力韭山を攻撃して多大の犠牲を拂つて居る。何も小田原を攻めるのに、蕞爾たる韭山を左様に犠牲を拂つてまで攻めずともよさうなもの

であるのに非常に是に力を盡したのを見ても、如何に葦山と小田原城との關係が重大であつたか想像されるのである。而も葦山は關東八州の諸城が皆陥るに及んで然る後に開城した、何と壯烈ではないか。そこで太閤も北條氏規の忠勇を賞し領地を與へて其の祀を存した。随つて徳川氏も其の子孫を諸侯に列して之を存した。明治天皇の侍従として名高い子爵北條氏恭氏は實に氏規の後裔である。して見ると北條氏が勃興したのも此の葦山からであるが、北條氏の祀を存続したのも此の葦山である。されば葦山と北條氏とは始めあり、終りありと云ふべき關係を持つて居るのである。故に北條氏の葦山に於けるのは小田原に於けるよりもより深い關係を持つて居ると云ふのは即ち此點に存するのである

七 早雲の學問と人格

凡そ創業的の材能を持つて居る人傑と云ふものは、決して武の一面のみの人でなく、必ずや學問の方面にも心を用ひたやうである。是は有名な話になつて居るが、早雲は嘗て學者を招いて六韜三略を講せしめた。すると本文に「夫主將之法。務攬英雄之心。」とある一句に至り、もうこれで宜しい、講釋を止めよと言つたと云ふことがある。是は甲陽軍鑑に出て居ることであるから、絶對には信する譯には參らぬが、併し此頃の武將はいづれも六韜三略を讀んで居る凡そ此の時代に一國の主として少しく英名のあつた人は皆六韜三略を研究して兵法の典據ともいたして居つたのであるから、早雲が之を讀んだと云ふことは此の時代に於いて然もあるべきことと思はれる。又主將は務めて英雄の心の攬

ると云ふ一句で其の巻を掩はしめたこと云ふのは實によく早雲の人格を現はして居るから此話は本當の事であらうと思つて居る。又早雲は太平記を非常に研究した。それは今川本の太平記に永正二年の奥書がある。それに依ると、早雲は平生好んで太平記を読んだ。それでいろ／＼な異本を集めて自ら之を校合したけれども尙ほ是非を決するに當つては誤りがあるといけないと云ふので、自分の校合した本をば足利學校に送付して、そうして足利學校の學徒に批評さして異同を決せしめた。尙ほ其の上に上洛の序を以て壬生三位に托して朱點と讀方とを附けて貰つたと云ふことが書いてある。斯の如く彼が太平記の研究は史學専門家も殆んど及ばない程である。之を以て推して見ても彼は學問に心掛けの深かつたこと云ふことが推測し得られると思ふ。是等は皆な決して慰みに讀んだのではない、滿腔の精神を打ち込めて讀んだのである。即ち一方には武家の實

典として讀み他方には武家の歴史として研究したものである。尤も太平記や六韜三略やは此の時代の流行物であるから早雲一人が特に之を研究したといふ譯ではないが、早雲の如きは其中でも最も熱心に讀んで最も實際に應用した人である。又唯今世に傳つて居る普通本の東鑑と云ふ物があるが、是等も元と小田原の北條家にあつた物である。これが徳川家に傳つて家康が版にして段々擴めたこと云ふことである。是は小田原の落城の時に黒田長政が講和談判として城に這入つて、講和を結んだので北條氏から其の謝禮として早雲の所持して居つた刀と、東鑑とを黒田長政に贈つた。但し東鑑の方は早雲が持つて居つたか何うか分らないが、併し早雲の佩刀と共に贈つたと云ふことを見れば或は東鑑も矢張り北條家に取つては來歴のあつた大切な物と思ふ。早雲が太平記を讀んだ位であるから、東鑑なども必ず讀んだであらうと思はれる、北條

家の制度は現存せる文書に徴して見ると鎌倉幕府に倣つて居る點が多いのを見
ると、早雲以來東鑑と云ふ物に依つて、武家の制度をば參酌して小田原の法
制を造られたに相違ない。又早雲ばかりでなく北條家は代々學問を好んだ。彼
の氏康氏政なども足利學校の僧を呼んで六韜三略を講せしめて之を聽いたと云
ふことがある。其時にその報酬として文選を學校の僧に賜つたと云ふことであ
る。その本は現に足利學校に残つて居る、此の足利學校の文書に依ると、北條
氏が特別の扱ひを以て學校を保護して居つたと云ふことも徴せられるのである
歴代斯の如くして學問をば尊重いたしたのは矢張り早雲以來の遺風ではあるま
いかと思ふ。又世に早雲の二十一ヶ條と云ふものが傳つてある。是は北條家の
家憲とも云ふべきものである、併し其の文章を見ると早雲時代よりか稍々後の
物であらうかとも思へる。けれども北條五代記の著者は此の二十一ヶ條に付い

て吾等幼年の頃は關東の兒童が一般に之を手本として手習をしたものであると
云ふことが書いてある、して見ると北條家の政治の盛んなる時から、此の二十
一ヶ條と云ふものは用ひたものであるやうに思はれる、であるから縱令早雲の
作つたものでないとしても、早雲以來北條氏の家風の一斑を窺ふことが出來や
うと思ふ、又之を以て當時北條家が教育と云ふ方面にも深く心を用ひたと云ふ
ことも分るのである。

さて最後に早雲の人格如何と云ふことに就いて卑見を述べやうと思ふ。是は
いろ／＼な事實を列べて居ると長くなるから、その一つを擧げて他を略す事と
する。朝倉宗長話記と云ふ物がある。其中に早雲の事を書いた一節がある。其
文に、

伊勢早雲は針をも倉に積むべき程の蓄へ仕り候つる、雖然武者邊につかふ

事は玉をも砕くべう見えたる人にて候由、宗長常に物語り候

宗長は此時の人である。連歌師で親しく早雲に會つた人である。此の一語は實に遺憾なく早雲の人格を現はしたものであらうと思ふ。

其意味は平生針程の小さな物でも無駄にしない儉約をして、そうして倉に蓄へて置く、して見ると甚だ吝嗇のやうな人物であるが、いざ戦争となると金銭は愚か玉をも砕いて少しも惜氣もなさうに見えるのである。斯う云ふ譯なのである。定めて御覽であらうが、小田原の早雲寺に早雲の肖像がある。それを見るに成程斯う云ふやうな猛烈な氣性を表はして居る。尤も是は重に經濟の事柄を假りに批評したのであるけれども、併し彼の行動の總ての場合には皆な此の批評を以て説明することが出来るであらうと思ふ。それは非常に緻密な所があつて、そうして而も勇斷に富んで居る。言ひ換へて見れば細心にして大膽であ

る。所謂英雄の英雄たる眞價と云ふものは此にあるであらうと思ふ。頼朝も然り、又尊氏も然り、豊太閤も然り、信長も然り、家康も然り、何れも細心にして大膽と云ふ性格を有つて居る。併し信長にしても、家康にしても、兎に角門地と云ふものを持つて居る、門閥と云ふものを持つて居る。獨り豊太閤と早雲との二人のみは實に一匹夫より起つてそうしてア、云ふ大いなる事業を起したその然る所以を究むれば細心にして大膽と云ふ一語に歸着するであらうと思ふ。私は此の一語を以て早雲の一生を結んで終りとする。

桶狭間の戦ひ

一 今川義元と織田信長

軍と云ひ、戦といふ、この言葉を聞いただけでも勇ましく強く勇ましく、實に凛々しい感じがするではないか、だから戦と云ふ戦は多いが、今から話さうとする戦ほど、痛快な戦は外国にも稀である。

日本初つて以来此の戦程愉快の戦はないと同じく、その戦をした織田信長ほど愉快な大將は、日本初つて以来、外にはないのである。無論外国にも稀である。

桶狭間の合戦は、織田信長が最も愉快に、今川義元の軍を討ち破つた大愉快戦なのである。

義元は駿遠三の三國を領し、兵馬強壯にして海道一の大將と、世にも恐れられた大英傑であつた。義元此上の慾には、領地の隣なる、尾張の國をも占領したい、併合したいと日夜の願望であつた。その願望さへ出さなかつたならば、義元も、さう早く滅びはしなかつたらう。又義元にその願望さへなかつたならば、この桶狭間の合戦もあるまいし、信長が急に大勢力を占むる事にもならないで、歴史に一つの花々しい戦記を残さなかつた事であらう。思へば興味ある人事ではある。

さて、義元は豫ねての願望を果たす爲めに屢々兵を國境に出して織田に迫つた。織田信長は其の頃年漸く二十七、未だ尾張一國すら統一する事が出来ないで居た。従つて其の兵力の上から見ても義元の大軍に對しては實に螻蛄の龍車に當るにも似て居たらう。又防禦の上から謂ふにしても、よく敵の大軍に對す

る事がどうして出来て居やう。
 而も、彼れ年若の信長が、大敵今川勢を物の美事に討ち破つたる此の桶狭間の合戦思へば愉快此上もない事ではないか。

二 信長の膽力

時しも永祿三年五月十八日、今川義元は三國の精兵四萬餘人を率ゐて信長の領する尾張を、一舉に併呑しようと、凄まじい勢ひで寄せかけた。この先鋒隊は、逸早く、尾張の國に入るや、まづ丸根、鷺津の二城の攻撃を始めた。この二城は敵國に一番近い所、信長も豫て此の二城が一番に攻められるであらうと思つて、守備の爲に丸根城には佐々木大學を遣はして置いた。鷺津城には織田玄蕃を入れて置いた。兩人は今や今川勢の先鋒に鋭く攻めかけられると、それ

來たとばかり急使を立て、清洲の城に居る信長の許へ、その旨を注進に及んだ。

信長は此の時、常の如く老臣を左右に集めて、浮世談に夜を過して居た所であつた。豫て覺悟はして居たとは云ふものゝ流石の大敵が攻め寄せたと聞けば驚くは誰しものこと、老臣ども、顔を見合せ、信長の顔を見守り大事になつたがと打ち案じるに引きかへ、信長は、よしとばかりで驚く所か、益々落着いて夜話をついける平氣さ加減、とは愚か、無神經か、やがて夜も深けたので、信長は老臣どもに、夫々歸邸を許した。丸根、鷺津の二城の事については一言も言ひ及ばなかつたので、老臣共は手持無沙汰に、且つあきれ、且つ案じて、互に殿様は何うかなされたものであらう、大事な二城の今此の場合何の相談もなされず防戦の評議もない、あゝ痛ましくはあれど、御運もこれまでかと思はる

と不安の中に引き下つたも尤も千萬。

程なく、丸根、鷺津の二城から第二の急使は来た、共に、敵を防ぎかねるといふ事を注進に及んだのである。之を聞くと、信長は、やをら立つて、舞を舞つた。此の場合舞とは何事ぞ、舞は「敦盛」その文句に曰く、

『人間僅か五十年、天下の内をくらみれば、夢幻の如くなり。一度生を得て滅せぬものはあるべきか。』

高らかに誦し、舞ひ終るや、手早く甲冑に身を固め、立つたまゝで食事をすませ、只一人、單騎鞭を當て、出立した。

餘りの急に、此の時之れに従つて清洲の城を出たものは、僅かに五騎であつた。

遙かに東の方を見やれば、敵に圍まれた二城は既に落城と見えて、城は火に

かゝりて、火炎天を焦す有様は、凄まじくも恐しくも残念である。信長は、善照寺と云ふ城砦に入つて勢揃ひをして、人員を檢べると、集まる者漸くにして二千一人。

信長は、こゝで敵の様子を探ぐる事にした。

三 敵の本陣へ猛進

義元は桶狭間に陣を置いて、丸根、鷺津の二城陥落すと聞くと、幸先よしと大に悦んで、酒宴を張り、謠曲を誦はして打ち興じて居た。

斯くすると聞くや信長は、寸時も俟たず義元の本陣目蒐けて進撃しやうとした。老臣は衆寡敵せず無謀の擧として信長の乗て居る馬の手綱に取り付いて止めた。信長は聲勇ましく言ひ放つには、

「敵は一晝夜、攻撃に疲れ果て、居るに相違ない。だから我が新手の兵力で攻めさへすれば勝つ事は請合である。且つ小軍なりとも大敵を恐るゝこと勿れ、といふ格言もあるではないか、我れに勝算ある事は火を見るより明かである。各々この戦に出たものは家の面目であるぞ、末代までの功名である進め、進め。」

と、自ら真先に立つて馬を驅つて敵の本陣目差して進んだり。

たま／＼此の時天闇くして大暴風雨となつた。雲を衝くばかりの大木がメリ／＼と吹き倒されて敵の方へ倒れる。信長はこの天の時に乗じて、猛進、邁進忽ちに敵陣に攻め込んで槍をおつとり、か／＼と號令した。

義元は、大軍を率ゐながらも、何と手出しの仕様もなくて、旗元僅かに三百騎ばかりに擁せられて、逃げ出したが、終には五十騎ばかりになつて居た。信

長勢は追撃功を奏して愈々義元に肉薄するや、遂に白兵戦となつた。信長は、馬から飛び下りて、若武者共と先を争ひ、突き伏せ、突き倒し、火花を散らし、奮戦したが、まだ義元らしいものに渡り合はぬ。その中に服部小平太が折よく義元と斬り結んで居たが、膝を斬られて打ち倒れた。義元の運は未だ盡さぬかと思はれた折しも、毛利新助が駆け寄つて、首尾よく義元を討ち、その首を取つた。

今川勢は總崩れ、織田勢は大勝利となつたのである。

五 以 奇 制 勝

信長は数十倍する軍に物の美事に打ち勝つた愉快な戦ひをしたものである。面白い勇ましいどのみでは首かれぬ。何うしてこんなに、勝つたかと、考へて

見ねばならぬ。そは一言にして盡す。一に曰く、彼の膽力、二に曰く、彼の智力、只此の二つである。

敵の大軍が一城に迫つても平氣で夜話をつけた沈着、膽力は大きい。忽ちにして『あつもり』を舞ひ『人間僅か五十年』の句を誦して出かけた決死の態度、その膽力は非常なものである。次に、義元の本營は桶狭間だった。けれどもその先鋒は鳴海、大高の方面にまで廻轉して大戦線を張つて居た。兵の少ない信長は是等の各方面に攻め向はせる事は出来ない。二千人を只一團として本營に斬り込んだのである。これ所謂『以奇制勝』である。即ち智力である。

實に信長が、日本初つて以來の大快戦をしたのは彼の膽力である。勇氣である。又この智力である。決死的の智勇を發したからである。

のち信長が天下に覇を致したのも、此の戦に於ける決死的精神を以てすべ

ての事に當つたからであるといつても過言ではない。

伏見と桃山

一 平安朝時代に於ける伏見

平安朝時代に於ては伏見は歴史上柏原野として見えて居る。それは桓武帝が屢々此柏原野に獵を催されたのが記載されて居るのである。桓武帝は何人も知れる如く非常な雄武なる御方で毎年獵は諸所に催された。而して屢、柏原野にも御出になつたのである。其當時の獵は只の遊びでなく、一面武事を講ずるので、今日で云つたら大演習とも云ふべきものであつた。桓武帝が崩御になると此柏原野に、山陵をおかれ現に柏原の陵として存在して居る。

何故に此處に山陵をおかれたかといふことは分らないが、帝が屢々此處に幸して此の地の勝景を愛でられたので此處に山陵をおかれたのではあるまいかと思はれる。

所が明治帝に於かれても桓武帝の如く殆んど毎年大演習を行はせられて諸所に行幸あらせられたが、伏見に行幸のあつたことは別段に承知せぬけれども、近年桃山を御料地に入させられ、一般人民の入るを禁せられ、又崩御になると直ちに桃山を山陵とすることに御決定になつたのを見ると、何となく嘗て此處に深き思召しがあらせられた如くに想像し得らるのである。且桓武帝は神武帝以來の大帝で、明治天皇は桓武帝以來の大帝である。而して此の兩大帝の山陵が相並ぶ様に成つたのは殆んど偶然でない様に感ぜらるゝのである。

其後藤原頼通の子に俊綱と云ふ人があつて伏見に山莊を作つたことがある。誰も知る如く頼通は宇治に平等院を作つた人で當時權勢並びなき人であつた。其の子の俊綱は風流なるが上に非常な富裕な人であつたから豪華な建築をしたものと思はれる。頼通が作つた平等院に聯想して如何にそれが優美壯麗であつたか想像し得られる。

而して彼が此處に山莊を作つたのはもとより其の風光を愛したからであるので、當時の歌人が其處に集合吟詠して殆んど虚日なき有様であつたと云ふことである。

嘗て白河帝が俊綱に向つて『京都附近の勝地は何處だ』と訊ねさせられると俊綱は『其れは石田と云ふ處が第一でございませう』と御答申上げた、すると『其の次は』と御訊に成り、『其れは高野で御座いませう』と申し上げた。すると帝

は「又然らば第三は鳥羽であらうな」と仰せられた。俊綱は、「いや、鳥羽は離宮であるから名高いので、其の實は臣が山莊の伏見が第三で御座いませう」と申上げた、と云ふことが、『續世續』と云ふ書物に見えて居るが、此を以て見ても如何に其の地の風光が勝れて居るか、又如何に建築の美觀を極めたかが想像し得らるゝである。

二 離宮としての伏見

其後伏見の地は帝室の御料地に成つて離宮が出来て後嵯峨、御深草、龜山の諸上皇が屢々之に行幸せられた。而して其の景色を賞せられたが、其の後、伏見、後伏見、光嚴、光明、崇光の諸上皇は此處を離宮として御住居になつた。其れを伏見殿と云つた。太平記には『此の離宮はさしも紫樓紺殿を彩り奇樹怪

石を集めて見處多くありし栖屋なり」と書いてある。如何に輪奐の美を盡せるかが分る。

又此の離宮を中心として其の園に大光明寺、光明院、光嚴院、崇光院、保安寺、大通寺、指月庵などいふ寺院が出来た。

其れは皆帝室の筋で御建立になつたものである。而して其れ等の離宮及佛閣は何れも今の桃山の名勝を占め、蔓を並べ光を放つて居た有様が想像し得られる。斯くの如く此の地は仙洞の離宮として歴史上著名の地となつたのである。殊に離宮に御住になつた崇光院は、實に明治天皇の直系の御祖先にあらせられる御方で、又現今の宮家、小松、北白川、伏見、閑院、東伏見、梨本、久邇、の宮等は皆此の崇光院より分流せられたる御血統である。

されば此の地は明治天皇にとりては殊に縁故深き地であるが、それが今度又

御陵になつたのは是亦偶然でないやうな感がするのである。

三 秀吉時代に於ける伏見

秀吉は關白職を秀次に譲ると同時に大阪城をも譲つたが、伏見は京都と大阪との要路に當つて居て、形勝な地勢を有して居る所からそこを自分の居城になさむとして、文祿三年に工事を起した。此の工事は中々の大工事で二十五萬人の工夫を使つて城を築き始めて忽ち落成した。それと同時に諸將の邸宅をも伏見に置いたから、伏見は俄然として壯麗の大都府となり、大小の政治は皆こゝから出て天下の中心となつた。

丁度其時征韓の役で講和の議が起つて、明王は秀吉を日本國王に封ずることになつて、其の使者が冊封を奉じて來たので秀吉は之を城中に引見して彼の冊

封を讀ました所が、「汝を封じて日本國王となす」と云ふ處に至つて秀吉は大いに怒つて、冊封を地に抛つて……其使者を追ひ返したと云ふことは有名な史談であるが、其の事が演ぜられたのは實に此の伏見城である。乃て秀吉は更に再征の議を決して又もや大軍を發して朝鮮を征伐したが、其時遙かに海外の軍事を督したのも此の伏見城である。此時にあたりて秀吉の威勢海外に振つて呂宋大港初の南洋の諸島往々使を遣して入貢したのも此伏見城である。而して世界的英雄たる秀吉が永き眠に就いたのも此の伏見城である。

四、家康時代に於ける伏見

秀吉の薨するや家康は伏見城に入つて天下の政治を令したが、關ヶ原の軍起るに及んで西軍が最先に伏見を攻めた。

家康の守將たる鳥居元忠が防戦して之に死し、城は遂に陥つたが、家康は關ヶ原に勝つて後又伏見に入つて政治を令した。而して慶長八年に家康が征夷大將軍の宣旨を拜受したのは實に此の伏見城である。此時勅使は京都より宣旨を齎らして此の伏見城に至り之を家康に授けたのである。

家康は遂に天下の諸侯を率ゐて伏見城より入朝して之を謝し奉つた、其の時の行列の壯觀は天下の耳目を驚かしたと云ふことである。

されば此の當時の伏見は如何に殷賑雜沓を極めて天下の耳目が之に集注したかが想像せられるのである。

其後元和元年に大阪が落城するに及んで、同じく六年に伏見の城をこぼつて終つた。それは大阪が亡びたから伏見城を存置する必要がなくなつたからであらう。其處で其の建物は京都の諸寺に分配せられて、今日存在して居る。即ち

京都の西本願寺の唐門、飛雲閣同じく書院、大徳寺の唐門、豊國神社の唐門近江竹生島の観音堂等で、現に特別保護建造物となつて居る。

此等は何れも桃山時代に於ける雄麗なる建築と見るべきものである。又其の伏見の城跡からして當時の瓦などが發見されるが何れも金で塗つてある、今度山陵を作るについて掘り出された瓦も金色のものであるとか、これを以て見ても如何に華美を盡した大建築なりしかが想像される。そして廢城後には、その址に桃を澤山植ゑたので、自然桃山の名稱が出来たのである。されば桃山と云ふ名稱は後世名づけたもので、それ迄は伏見と云つて居たのである。然るに歴史と秀吉の時代を稱して桃山時代と云ふのは穩當でないかと思ふ。

五 明治時代に於ける伏見

明治元年正月徳川慶喜が會津、桑名等の兵二萬を率ゐる薩長の罪を問ふと稱して大阪を發して京都に入らんとした。

そこで朝廷では薩長二藩に命じて之を伏見鳥羽に防がした。兩軍衝突して此處に激戦となり賊軍は敗走した。此處に於いて朝廷は有栖川宮熾仁親王を征夷大將軍として東海、東山の兩道から並び進んで遂に江戸を平定し、併せて奥羽をも鎮定して遂に都を東京に遷さるゝに至つた。されば此伏見の一戦は實に東京遷都の序幕で、明治史の第一頁を飾る目出度き史蹟である。

六 結 論

以上述べ來りたるが如く伏見桃山の地は歴史上顯著なる事蹟を有して居る。其れが先帝の山陵となつたに付いては不思議な事が四つある。何となれば桓武帝は神武帝以來の英主に在まし、日本の版圖を擴張して都を平安に奠めさせられたと云ふ事は大小廣狹の違はあるけれども明治天皇が日本の版圖を擴張して都を東京に奠めさせられたとよく似て居る。斯くの如き不世出の帝王の山陵が並ぶに至つたのは、己に一つの不思議である。

又先帝直系の御祖先が御愛仕あらせられた離宮の地が山陵となつたのは二つの不思議である。又舊日本の武威を世界に轟かした英雄が永い眠りについたのである。

は此の伏見の地である。

そして先帝の英靈を鎮め奉ることになつたのは三つの不思議である。明治維新に於ける東京遷都の端を開いた戦勝の地に明治大帝を葬り奉るのは四つの不思議である。

此四つの不思議は偶然に似て偶然に非るが如き感があると同時に、我が明治天皇の英魂を鎮め奉るべき靈地は、伏見桃山こそ實に好箇の幽域であると思ふのである。

因に云ふ明治の功臣中特に勳績あるものは伏見桃山山陵の附近に葬地を賜ひて古に所謂陪塚の如くその墳墓を立つることを許さる。されば明治天皇を欽仰し奉ると同時にその股肱の良臣をも追想し永く國民に精神的感化を及ぼすであらうと思ふ。

而してさしづめ乃木大將の如きは、此の恩典を與へられても然るべき人であらうかと思ふのである。

水谷町より發掘せる石垣

編者云、曾て東京市京橋區水谷町にて川筋變更工事の際に石垣船材發見せられたりとの報新聞紙上に見えしが、恰も大學にて出版の大日本史料に見ゆる船入場を築く事實に當るとの事にて田中博士實地に臨みて調査せられし時の談話なり。

目下出版に着手しつゝ、ある大日本史料十二編の九慶長十七年三月一日の條に幕府が西國の諸大名に命じて江戸の船入場を築造せしむると云ふ事實がある。この船入場を築くと云ふ事は今日の言葉で申さば即ち築港のことである。

さて其箇條に收めてある諸書に就て考へて見ると餘程の大工事であつた様である、其内當代記には『江戸石垣普請』とあり、又細川家記には『江戸の堀川

御堀直し方々の橋床石垣に被仰付諸感より役人江戸に下り候」などと見えて居る。之れによれば船入場は何れも石垣で築き立てられし物と思はれる、然るに其後江戸の市街は追々膨脹して海なども大分に埋めたてたから、慶長の當時に於ける船入場などは那邊であつたかわからなくなつたのである。然し慶長史料の擔任者たる辻氏は寛永版の江戸圖に今の京橋八丁堀の處に船入と書いてあるので……或は此邊であらうかどの所から参考の爲めに其部分を縮寫して史料に收められたのである。私も之れに同意を表した。

然る所 東京日々新聞に京橋區水谷町附近の川筋變更の爲めに目下開鑿中なるが、地表十六七尺に至ると長さ六七尺幅五六尺厚さ二尺乃至二尺七八寸位の巨石五個を發見したところ、其位置は南を正面にして東西に駢列してある。但し發見せられたる石はそれだけなるが、猶地下に、東西に亘つて連続してゐる

様である。技師の説によるに之れは昔の護岸の石材であらうと云ふ話であることが記載してあつた。

仍で私どもの考へには、發見せられた石材が果して護岸の石垣ならば、或は慶長十七年のかも知れぬと思つて、是非實地に就いて見たい物だと思ひました。そこで三上、辻の兩氏と共に水谷町の堀割事務所に赴いて、主任技師吉田信近氏の案内で實地を調べましたが、新聞にあるのと大差がなかつたのである。其時技師の説にも發見の石材は確かに人工的に排列してあつたものであるから護岸の石材に相違ないとの事であつた。但し其石質を尋ねたが、年寄の石工などに聞いても何處の産であるかわからない、或は九州邊の産でないかと云ふ人もあるとの事であつた。然し大日本史料に載せたる材料によると此時の石材は多く伊豆から取寄せたと云ふ事になつてをるから、伊豆石でないかと尋ねた所、

決して伊豆石でないこと云ふ事であつた。兎に角其石質は非常に堅硬なもので護岸には尤も適當な性質であると云ふて居つたのである。夫れから又其石垣の近邊には船體の一部が発見せられてをつた。其帆柱があつたが、二つに切斷されてあつた。之れをつぎ合はせると九間程の長さになるので、可なり大きな船だと思はれる。蓋し之れは或時代に石垣下に沈没したものと見える、是れを以つて見ても此邊が昔海岸であつた事がわかる様に思はれます。して見ると水谷町一帯の地を堅固な護岸の石垣で築き立てられ、防波堤の狀をなして漂渺たる江戸海に臨んであつたに相違ないと思はれる。かゝる大工事は慶長十七年以前にはない様であるから、どうしても之れは此年に築造せられたものであらうと考へるのである。参考の爲めに石垣発見附近の場所を略圖にして示さう。

抑も日本橋京橋邊は太田道灌が江戸城を築いた頃から船入場として物貨聚散の中心點となつてゐた様である。彼の南禪寺の龍統が道灌の爲めに作つた「寄題江戸城靜勝軒詩亭」の中に「城之東畔有河、其流曲折而入海、商旅大小之風帆、漁獵來去之夜篝、隱見出沒於竹樹烟雲之際、到高橋下繫纜閣擢、鱗集蛟會



日々成市、則房之米、常之茶、信之銅、越之竹箭、相之旗旄騎率、泉之珠犀異香、至鹽漁漆屨筋膠藥之衆、無不彙聚區別者人之所賴也、於呼不出此室、收天地人、以爲吾有肆武」

と、あつて、此文中に高橋とあるのは、即ち今の日本橋邊の川筋の橋かと思はれる。此れに依つて考へて見ても往古より日本橋古橋邊は河海交錯の處であるので太田時代から、斯く般賑を極めてをつたものと思はれる。

故に慶長築港の時にも主として京橋日本橋邊の船入場を經營したものである。而て偶然にも水谷町に於て當時に於ける築港の遺跡の一部と思はるゝものを發見して恰も出版せんとする大日本史料に有益なる材料を與へたと云ふ事は洵に斯學の爲め幸福であると思ふ。

今度も市區改正につれて或は種々なる發掘物があるかも知れない。それにつ

いては吾人はもとより注意を怠らないが、諸君の中にも御見聞の事あらば幸ひに示教を惜むことなからん事を希望いたす次第である。

太田道灌の木像

赤羽停車場の南に當りて、一高丘あり、老樹蒼鬱として雲の如く、石楮を拾ふ事四十八級にして其の嶺に達す、上に太田道灌の影堂あり、之を靜勝寺とす、地は武藏豊島郡稻付村に屬せり。

寺傳に依れば、之は太田道灌の城跡にして僧雲岡といへるもの、就いて寺を建て、道灌寺と號せり、道灌六世の孫資宗といへるもの城跡の地を擧げて當寺に附し、道灌の法諡に取りて、靜勝寺と改むといへり。

余は七八年前、郊遊の次を以て、當寺に至り、所謂影堂なるものを訪へば、風雨蔽はず、頽廢して倒れんとす、其の中を窺へども、像を見ざりき、寺僧に問へば、像は今移して房中にありといへり。乃ち就いて之を観るに、法體の姿

にて、道服を着け、右手に拂子を執り、左膝を立て、坐し、側に小刀を置けり像の長け僅に二尺許なりと雖も、風丰魁偉、精采人に逼るを覺ゆ。

按ずるに、開山雲岡は、道灌と契縁甚だ深く、文明八年、道灌の招に依りて江戸青松寺の開山となりたる人なれども、其の當寺を建てしことは、他に明徴なく、萬年山志に收めたる雲岡の傳にも、其の事を載せず、且果して雲岡の建つる所ならば、道灌寺などいへる俗稱を付くべきにあらず、また靜勝てふ名は道灌が書齋の號にて、其の法諡にてはあらず、寺傳の云ふ所は恐らくは信すべからず。蓋し雲岡は道灌と關係深かりしが故に、後より追うて之を開山に擬せしにて、所謂勸請開山に過ぎざるべし。

因つて之を他書に徵するに、道灌讒死の後、其の孫資高、北條氏綱に屬して武藏岩淵に住せし由、太田家記に見え、資高の子資康も、岩淵五箇村を領せし

こゝ北條分限帳にのせたり。岩淵五箇村は、新編武藏風土記稿に、岩淵宿及び袋村下村赤羽根村稻付村等を以て之にあてたり。乃ち知る此邊は太田氏の所領なるを。因つて思ふに、當寺は即ち資高の居館もしくは別館のありたる所にあらざるか、眼界空豁、平野渺然、荒川逶迤として帶の如く、波山を天際に望む真に好箇の館地たり。資高乃ち祠を立て像を設けて、道灌を祀りたるか、況んや館中に祠を設くるは、當時の習俗なるをや。

されども此の像の果して道灌なるや否やに至つては、未だ遽かに斷すべからざるものあり。何となれば、資高後江戸に走り、其の子資康、北條氏に叛きて安房に走り、太田氏遂に跡を武藏に絶ちたるを以て、郷人祠を建て、資高もしくは資康を祀りたるを、誤つて道灌となせしも亦未だ知るべからざればなり然りと雖も其の太田氏の像たるは則ち一なり、安んぞ之を欽尙せざるを得んや

蓋し丘上先づ此の影堂あり、然後僧ありて之を守りしかば、道灌など呼びたりしを、更に寺院を構ふるに及んで、靜勝寺と號し、雲岡を勸請して開山となし、併せて寺傳を作りたるならん、道灌の江戸城を築くに當り草莽未だ開けず猶ほ漁蟹の郷たりしも、一變して雄霸の居となり、瓦萬鱗の如く萃まり、再變して帝國の首府となり、萬國會同、百貨雲集の盛を致せるは、道灌之が基を開けるなり。

余は東京宮城の巍然として雲表に聳ゆるを望む毎に、未だ嘗て道灌の遺風を想見せずんばあらず、而して其の祠堂を訪ひ、風雨の蔽はざるを見るに及んでは、亦安んぞ黍離麥秀の感に勝へざるを得んや、余乃ち我が東京市民の、之が保存を議し、之が表彰を謀り、以て斯人を永遠に記念せんことを切望して已まざるなり。

通法寺の源氏の墳墓

余は去る年夏大阪に赴きたる次でを以て、河南鐵道に駕して、河内なる富田林に至り、それより雨を衝て金剛山に登り、楠氏の墟を弔し、還りて古市に至り、譽田の祠を拜し、石川に沿て、壺井社に謁し、通法寺を訪ひ、源氏の墓を探り慨然として以爲らく、楠氏の高節は金剛の山と並峙して、終古墜ることなく、譽田の祠は屹然として雲に聳ゆるも壺井社通法寺に至りては、何ぞ荒廢の甚しきやと、壺井社は、康平七年源賴信朝臣の建立にてその傍に一社あり賴信、賴義、義家朝臣を祀れり、こは天仁二年の造立にても壺井權現社と稱せり、今は何も朽ち果てたり、殊に通法寺の如きは、堂宇みな廢して獨り賴義朝臣の祠堂と云へるものを存せりと雖も、これまた頽圮を極め、寺内は鞠まり

て茂草となり、實に荒涼たる光景なり、されどこの地はもと形勝の區にして、峯巒翠を凝らして、その後を抱擁し、石川の水逶迤としてその前を流れ、清淑にして幽峭なる一佳境たり、相傳て賴信朝臣の館址といへるは蓋し信ならん、壺井社もその附近なれば、これまた附屬の地なるべし、寺内には賴信朝臣以下三代の墳墓あるよしなれば、墓守の老翁に尋ねしに、寺後の山を指して、あれこそ賴義公の葬處なれといへり。よりにて案内をこひて登り見たれど、ただ矮松の生ひ茂れるのみにてそれと覺しき跡もなし。更に賴信朝臣の墓を問ひければ谷を隔てたる一方の山を指し示したり、且義家朝臣の墓も其奥にある由云ければ、いづれも一拜せんとして歩を進めけるが、日暮れかゝりて色を辨せざる程になりたれば、遺憾ながら踵を回して歸路につきぬ。

されば三代の墳墓は一々に深討はせざりしかど、この寺の文書に徵考すれば

その英魄のこの門に眠れることは疑ふへくもあらず。

抑々この寺は、賴義朝臣の建立にしてその來歴は、子爵田中光顯氏所藏の文治元年十二月通法寺僧徒の訴狀に詳なり、今これを摘要せんに當寺源氏御願觀音之靈地、粗傳二書契、情訪二由緒、故伊豫入道在家之時、河内國之中達磨山之麓、凌三林樹之風、尋三猪鹿之跡、瀝三野草之露、駕三驛驢之蹄、然間野火俄拂地、草堂雖レ化レ塵、等身千手觀音像一體、獨免三梅檀之烟、坐三蓮花之座……爾時與州殿下賴義朝臣暫停三狩獵之思、非拭三隨喜之淚、壺井郷之畔令レ建立三精舍、其精舍之中、奉清ニ彼尊像、故字稱ニ壺井御堂、額題ニ通法寺也、……其後相繼故八幡殿並六條判官殿御歸依尤盛也、ごありが散逸して下爵の手に歸せしならんまは通法寺文書、永仁七年正月十二日鎌倉下知狀に、當寺者爲ニ伊豫入道御建立之地とあり、永徳三年七月訴狀にも、當寺者御先祖賴義御建立之伽藍、ごあ

り、而してその墳墓の此にある證は永徳三年の訴狀の内に先年大地振之時、令崩到ニ伽藍之間、爲レ建立今御堂、引地之處、掘ニ岩石岩櫃之、其時寺僧等成ニ不思議之思可レ奉開ニ彼蓋ニ哉、不可レ開哉之段進退難ニ計之間、任ニ御孔子開レ蓋而奉ニ拜見者、御骨是歷然也、誠忝御事也、是則如ニ縁起之分明也總至此邊一者、當國々人達、於レ今下馬、爲レ宗致ニ其敬、此等子細、於ニ國中ニ無ニ其隱之者哉、殊此在所猶在ニ御賞翫、自身撰レ地植レ松被レ築ニ御廟之、伊豫入道殿八幡殿被レ立ニ二基之石塔、並有下御建立墓堂、而割一分件免田四町三段所ニ有ニ所支配、通法寺並彼御墓堂之修理佛性田也、凡至ニ于源家之末葉一者、可レ興ニ隆當寺之旨有ニ御遺言ニ云々とあり然れば賴義義家朝臣の墓のこの寺内にあること明確なりとす、但し今御堂とあるは、何れの邊なりしか的知すべからずと雖も、現存せる賴義朝臣の祠堂の邊と大差なかるべし、また被立ニ二基之石塔、並有御建

立墓堂とあるを見れば、兩朝臣の墓は相並て立てるが如し、然るに今の義家朝臣の墓は本堂の跡より東南三町餘の山中にあり、且頼義の墓も大に懸隔せるは、文書と齟齬したるに似たり、されど壺八幡意趣略記によれば、今の墓は元祿年間水戸光圀卿が當寺の古跡を調査ありし時に營築ありしものと見ゆれば、果して眞の塋域なるや否や疑なき能はず、更に調査の上に點定したきものなり、さて兩朝臣の墓は右の如く古文書に見えなれど、頼信朝臣に至りては確なる證左なしと雖ども、尊卑分脈の義家朝臣の條に、頼信頼義義家三代墳墓在河内通法寺と記せり、思ふにこの邊頼信以下の館跡にて既に頼義朝臣父子の墓あるときは、頼信朝臣の墓もこの間にあるべき筈なり。

これまた捜査點定せざるべからず。

上に述べたる如く、壺井社通法寺ともに源家の古跡なりければ、鎌倉より室

町に至るまで、崇敬他に異なりし事は、壺井及通法寺の文書に歴々たり、永徳三年の訴狀に義家朝臣自筆寄進狀頼朝卿自筆御教書を副進せるを見ればその頃までは、八幡公の眞蹟さへ傳へたりと見ゆ、惜むらくは今逸せり。

徳川時代になりても崇敬ありて、綱吉將軍のとき、壺井へ正一位を贈られ、通法寺村を擧げて寺領にあてられ、諸大名參詣の時、村内に入れば、槍を伏せしめしと云ふ、諸大名參詣云々の事しか、然るにいま壺井社は朽ち果て、通法寺は廢寺となり、絶大なる英雄の遺跡をして煙散霧消に歸せしめんとす、豈に遺憾ならずや。

余はかの鬱然たる寺後の山嶺に上りて、徘徊顧眺して、英名偉烈乾坤を鼓助し、古今を照耀せる名將の相踵でかゝる瀟洒たる山水の間に興れるを異とすると同時に、一大史跡として、これを永遠に保存せられんことを熱望して已まざ

るなり。

賀名生皇居の址

賀名生皇居の址

余嘗て吉野舊事記を閲して、賀名生の土豪堀氏は、南皇駐蹕の處なるを知り又、其の室屋は當時の遺物なるを聞き、嘗て一たび透觀せんと欲せり、適、辛卯十一月、奈良に出張せるを以て、遂に之に赴かんとし、奈良より汽車にて五條に抵れば、堀氏の主人なる重信氏、偶此に在りて、迎接せられたり、同氏は南朝忠臣の裔と云ふを以て、現に吉野神社の宮司たり、余の至るを喜びて將に自から導かんとせられたり、和泉堺の人林海音氏も、又余の至るを聞き來りて此に會せられたり、林氏は、屢、史局に往來して、余輩と相識り頗る吉野の史蹟を熟知せり、余は此の好伴侶を得たるを喜び、將に發せんとせしに、堀氏俄かに事故ありて、同行すること能はず、仍りて族人なる島田龍氏をして、

代り導かしめられたり。

乃ち曉を冒かして、島田、林二氏と共に、五條を發し、吉野川を渡り、丹生川に沿ひて行きしが、屑巒疊障、盤曲上下し、山益逼り水益束せり、新路は車を容るべきも、舊徑は緘が如く崖壑の間を繞り、昔時險隘の狀態見るべし、行く事四里ばかりにして賀名生に達す、一山あり、道を截つこと墻壁の如くにして、丹生川に臨めり、其の舊道は、崎嶇羊腸たるも、今は其中腸を開鑿して道を通せり、此山を踰ゆれば高門ありて路左に峙てり、即ち堀氏の宅なり、宅は山崖によりて、丹生川を帯び、頗る勝景の地なり。

門を入れば、正面に玄關あり、玄關を昇りて左に一室あり、傳へて御座の間と稱せり、近頃、其の床の間を改造したれ共、其他は皆當年の儘なりと云へりされども、余は建築上の事を詳かにせざるを以て、姑く其の是非を論せず、

卷頭に掲げし寫真に見えたる、門内の茅屋は、即ち此の室のある所なり、其の中に坐して眺望すれば丹生川雪を巻きて軒前を流れ、峰巒塊合して列屏の如く自から別乾坤を開けり、

更に庫内に入りて、寶物を見たるに、後醍醐帝より賜はりしと云へる旗及び笛等あり、楠正成の狀などありたれども、贋作なり、家系及び賀名生略記各々一卷あり、家系は書繼體にて現今に至れり、略記は、元祿年間梁山人の記せしものなり、梁山人は、吉野若清水庵に住せし、盤珪禪師の別號なり。

右の系圖及び略記に依れば、堀氏の祖信増略記には持忠に作れり、彼、熊野洪増の族にて、延元々年、後醍醐帝を其家に奉じ、尋で、行宮を傍らの山に營みて之に移し奉りし由なり、吉野舊事記及翠軒雜錄所載堀氏由緒書の説も大同小異なり。

今考ふるに後醍醐帝は、延元々々年十二月廿三日を以て賀名生に幸し、二十八日吉水院に移り給ひし由、天野山金剛寺古記に見えられたれば賀名生に駐蹕あらせられしは、僅に六日なり、されば、此處に行宮を營み奉りしと云へるは信し難し、されども、或は此時營み置きて他日の遷幸に備へ奉りしも、亦知るべからず、又所謂傍の山とは、寫眞圖に見えたる、堀氏の門の左なる山なり、其上に數百畝の畠地あり、字を華藏院と呼べり即ち其の寺地なり、大和志に、後醍醐帝皇屋址在賀名生莊和田村-傍有華藏院址とあれば亦堀氏の宅邊を以て宮址となせしなり、然るに堀氏を著はさざるは、蓋し故あるならん。

抑、堀氏の事は、當時の文書舊記には見當らず、吉野舊事記に至り、初めて詳かに之を載せたり、舊事記は天正年間の寫本なる由云へれど、文章の様、記事の體、恐らくは天正前後のものにあらず、大和郷土記を閲するに賀名生皇

居、堀源兵衛と記せり、此書は、寛永以前のものにて、舊事記よりは古色あれは、余は姑く之を以て堀氏を皇址とする説の初見とす。

余は更に進みて、黒淵村なる、後村上帝の宮址及び鎮國寺を訪はんとせしが日既に晡なるを以て止む、黒淵村は、堀氏の宅より東南一里ばかりにあり、其の處に黒木御所と呼べる地あり、即ち後村上帝の宮址にて、傍らに崇福寺址ありと云へり、鎮國寺は、堀氏の宅より東南十四五丁なる向賀名生にあり、後醍醐帝の御建立と傳へたれども、別に舊記の徴すべきものなしと云へり、寫眞圖に堀氏の背に綿亘せるは即ち向賀名生の由なり。

鎮國、華藏、崇福の三寺は、頗る注意すべきものあり、何となれば、賀名生は險隘なる地にして殆んど平處なし、唯三寺の在る處は稍餘地あり、且、河内の觀心寺、金剛寺等を以て之を例せば、賀名生に於ても、寺院に依りて、行宮

を營せられしことを推知すべし、華藏院の邊を醍醐帝の宮址とし、崇福寺の邊を後村上帝の宮址と傳へたるは、蓋し故なきにあらず。

既にして、堀氏を辭して歸途に就き、華藏院址に登りたり、此山は、即ち來路に道を截つて墻壁の如くなりしものにして、賀名生の形勝歷々として眉端に集まれり、思ふに、南朝の此に建つや、冠蓋山に滿ち、戈塵相映じ、以て一時の盛を致せしならん、而して今は則ち漠然として皆知るべからず、風聲鳥語、往事を悲めるが如く、人をして低回嘆息して、去ること能はざらしむ。

華藏院址に一古址墳あり、塔基地に湮せり、就きて檢するに、文字なし、之を土人に問へば、源親房墓と云へり北畠と云はず、源と云へり、然るに古野舊事記、大和志以下の諸書、皆之を載せず、豈に偶之を聞知せざりしか、抑之を聞知せりと雖も親房の偉人たるを知らずして、之を記するに及ばざりしか、

常樂記を按ずるに、北畠入道、一品准后覺空、於紀州、即ち大和、賀名生圓寂とあれば、或は此に葬りしならん。諸書之を逸して、獨り土人の口碑に存せるは、反て信據すべきに似たり、夫れ公は、東奔西走して四方の王師を激勵し百折回らず、恢復を以て自から任じ南朝五十餘年の命脈を延きたる所以のものは公實に之が基を爲せり、而して其英魄を藏すと稱せらるゝの地は寒烟荒草に委して、人の之を識るものなきは、慨嘆に勝ふべけんや。此の地果して公の葬所ならば、表して之を崇すること、阿倍野、湊川の祠に倍徙すと雖も可なり。然りと雖も之を祀ると否とは、以て公を輕重するに足らず唯其の墓を表して頽廢せしむることなく、之を國史に掲げて、不朽に傳ふことを得れば、即ち可なり。此地は堀氏の所有なりと聞き、氏に勸めて、試に之を穿ちて、證跡を得ることあらば宜しく天下に大呼して之を表彰する所以を謀るべしと云ひ置きたり

既にして、山を下りて、原路に出れば、崖上に古碑を見たり、乃ち攀ら登り、苔を剔して之を見れば、隠々として延徳二年、二百人等の文字を認めたり、蓋し戦死者を弔せしものならん、延徳二年は、後南朝の滅亡より、三十四年の後なり、此時に當り吉野の義徒、猶ほ兵を起して克たず、節に殉せるもの、二百人の多きに及びたるか將其事遠く前南朝の時に在りて、延徳に至り此碑を建てしならんか、姑く録して、他日の考に資す。夜に入りて五條に還る。夫れ南北朝の時に當り、紀伊、河内、伊勢の三州は、南朝の扞節となり、吉野は之れが根據たり、而して前南朝は金峰及び賀名生に據り、後南朝は北山に據り、其十津川天川の諸邑は、即ち亦皆南朝義徒の盤踞せし處なり、然るに諸書其間の事を記せるもの、大率、附會妄誕にして、信を取り難ければ、其地に行くも、徴するに足すと思ひしに、今賀名生に至るに及びて、略、宮址の所在を窺ひ、

廢墓斷碑の考に資すべきものを獲たり、是れに由りて之を推せば、賀名生以南勢紀に及ぶまで古址遺跡の徴するに足るもの必ず多からん、唯山谷深岨なるを以て、人の之を探るもの少なし、探るご雖ども、或は其の人に非ざるを以て、之を發見すること能はざるのみ、余將に其の間を跋涉し、異聞逸事を拾撫せんとするの志あり、夢寐の間、未だ嘗て南山を望ますんばあらざるなり。

興亡史論序其ノ一

我が帝國の臣民が、萬世一系の皇室を戴いて、二千五百年の生命を過去に維持せるのみならず、更に悠久なる未來に向つて、進歩發展を遂げんとしつゝあるのは、抑々何の理由あつて然ることを得るのであらう。それは申すまでもなく、歴代聖徳の宏大深遠なるに根柢せることは勿論であるけれども、古今内外の歴史を通觀するに、いかに雄大富強に誇れる邦國なりとも、數百年の久しきを經るときは、次第に衰頽に赴き、革命を馴致せざるものはないのである。獨り我國には、革命といふ様ないまはしいものはないけれども、國運に盛衰消長のあることは免れないのである。されば平安朝の中頃より、朝綱廢弛して、政弊百出し、貴族は歡樂に耽り下民は冤枉に泣くと云ふ有様であつた。若し之が

他の邦國であつたならば、必ずや風雲を捲起し、革命の慘事を見るべきである。然るに我國に於ては、かゝる場合にも、大本の動搖を來す様な事はなく、反つて滔々たる頽勞を挽回すべき一大新勢力の出現を見るに至つた。所謂新勢力なるものは何ぞや。曰く、武家即ち是れである。然らば、武家が出現するに至つた原因は、那邊にあるかと云へば、それは内外兩方面より觀察しなければならぬ。但、内的研究は、既に先輩の説かあるから、茲に呶々するを待たない。余は少しく外的觀察を試みようと思ふ。所謂外的觀察とは、朝鮮支那の方面から見るのである。余は去歲朝鮮支那に旅行して、朝鮮の風俗を見ると、依然として千餘年前なる唐代の遺風を存して居るのに驚いた。併しながら、我國でも、奈良平安の時代には、唐風を摸倣せること、朝鮮と同様であつた。然るに、我國は全然唐風を一變したが、朝鮮は

今猶ほ唐風を襲うて居る。僅かに一衣帶水を隔つる彼我の間に於て、此の如き相違があるのは、不思議の對照である。蓋し支那歴代の中で、朝鮮を征服して風を移し俗を易へしむるに至つたのは唐である。その後元が一時之を制壓したけれどもその他はいづれも藩屬を以て之を繋ぐに過ぎない。故に鮮人は無意識に唐風を因習して、今日に及んだのであらう。之に反し、我國は、多年耽醉せる唐風を脱却して、國民の特性を復活すべき機會を捉らへた。それは何であるかといへば、唐の衰亂するに及んで、遣唐使を止め、留學生を廢して、交通を絶つて了つた。是に於てや、我國民は有ゆる方面に向つて、次第に固有の特性を發揮し、遂に武家なるものを出現せしむるに至つたのである。然らば、朝鮮は何故に我國の如く、唐風脱却の機會を見出さなかつたのであらうか。それは彼我に於ける國民性の相違にもよるであらうが、朝鮮は支那と土壤を接して居

るから、朝貢を絶つことが出来ない。隨て事大思想を脱却することが出来なかつた。之に反して、我國は屹然として東海の表に獨立して居るから、唐土との通絶は自主自由である。故に、唐土の變亂を見て、自國の門戸を閉ぢ、自主獨立の發展を遂げたのである。併し卑屈卑劣の國民であつたならば、假令萬疊の海波を隔つることも支那に對して臣と稱するを憚らなかつたであらうが、我が國民の特性はこれを許さず、自主獨立を支持したのである。而して此の自主獨立の精神を擁護し發揮せしめたのは、即ち武家である。

此の如く、内外の關係より武家勃興の原因を観察して、初めて極東に於ける日本の位置を明かにすることが出来ると思ふ。獨り此の問題に止まらず、國史上に於ける重要な問題は、内外の兩方面から觀察しなければ、その研究を徹底せしむることは出来まいと思ふ。

さて、武家が勃興して以來、義勇を尙び、廉恥を重んじ、武を練り兵を講じ一旦沈衰せる國運を挽回して、元氣横溢の活勢を呈するに至つたので、胡元十萬の軍を粉碎して、外敵の窺竄を絶つのみならず、是よりして國民が海外に活躍するの氣運を開き、萬里の波濤を破つて、朝鮮に渡り、支那に入り、根據を占め、部落を成し、戰國時代になつては、南洋方面にまで發展し、到る所に日本封を造り、實際的に帝國の版圖を擴張するに至つたのである。豊大閣が海外征伐の雄圖も、かゝる氛圍氣の中から發生したに外ならないのである。而して之が歸納的原因を求むれば、即ち武家的精神の發展であり、光華である。然るに、是時に當つて、歐洲の強國たる西班牙、葡萄牙の二國が極東經略の雄志を抱き、印度を初めとして、南洋諸島の地を占領し、遂にその手を我國に伸ばし、宗教の魔力を以て我が國民を誘つたので、國民は靡然として之に歸

依し寧ろ神の命を奉ずるも、人の命を奉せずと云ふに至つた。豊公は瞿然としてその危険なるを看破し、禁令一下、之を海外に驅逐し、次で海外征伐の大軍を發し、朝鮮八道を風靡し、檄を南洋諸島に飛ばして、その朝貢を促した。皆その威に畏れて、敢て抗するものなきのみならず各々使者を發し方物を捧げて來り獻するといふ有様で帝國の聲威、東洋を壓するに至つた。惜むらくは、公の薨去によつて、征外の目的を達することが出来なかつたけれども、我が帝國を蔽へる西方襲來の低氣壓を一掃して、極東の大局を維持し、延いて歐洲諸國を畏憚せしむるに至つたのは無形の版圖を擴め、無形の長城を築いたのである。之によつて、外患敵國をして敢て帝國の門牆を窺ふこと能はざらしむると共に、帝國の位置を世界的に上せ、帝國の歴史を世界的に進めしめたのは固より公の偉大なる力によるのであるが、亦武家的精神の世界的膨脹である。

次で徳川氏（たか）の幕府を開くに及んで、初めは海外交通の方針を取つたけれども、宗效上の關係から、已むなく鎖國の政策を執るに至つた。鎖國の利害に就ては人々によつて議論を異にするけれども、二百餘年間の太平によつて、政治に思想に學問に技藝に國民的特性を培養し蓄積したのは確かである。されば、江戸幕府の末造に際し、露米英佛の諸強が通好を要し開港を逼り、之に次ぐに脅威を以てし、舉國動搖せるに當つて、幕府の有司は、之に對して辯難往復、百折撓（たは）まず、身を挺して之に當つたので、彼等もその熱誠に感じ、反て敬意を表し頗る讓歩するところあつて、遂に安政條約を締結するに至つたのである。當時有司の壯烈なる意氣は、凛々乎として彼等の膽を破るの概があつた。之を現代の形式的外交に比すれば、辭令儀法には嫻れざるも、精神氣魄の稜々として人を壓するものがあつて、明治外交の基礎を造つたのである。獨り外交のみなら

す、明治維新の大業も、その實は各藩に於ける慷慨愛國の志士が、難に殉へ及に觸るゝの餘に成つたものである。これらの有司といひ、志士といひ、いづれも江戸二百餘年間に醞釀せられた武士的精神の發露であり、また成功である。之を要するに隋唐文化の我國を沈浸し、我民を酣醉せしむるに當り、若し武家なる新勢力の發生することがなかつたならば、我國は朝鮮と其の運命を同うしたかも知れない。幸にして此の新勢力が起つて、我國を復活したのである。而して此の新勢力は、時代を経るに隨つて、益々その勢力を振ひ、我國に於ける三大危機を救つたと思ふ。その第一は世界的の大勢力を以て襲來せる胡元を一撃の下に碎破した。第二は、國民思想の根本を覆へさんとしたる西葡二國の勢力を驅逐した。第三は、幕府の有司が決死的態度を以て、歐米強國の壓迫に耐へ、平和の局を結ぶに至つた。此の如く、我々の祖先は斷々乎たる覺悟を以

て、敵國外患に對したればこそ、此の三大危機を救ふことを得たれ、否らざれば此の風光明媚なる國土は何人の逍遙するに任せたかも知れない。思ふて此に到れば、慄然として寒心せざるを得ないのである。幸にもかゝる存亡の危機を救ひ得たのは詮するところ、武士的精神の成功といはねばならない。

明治の御世に至り所謂武家なるものは廢せられて了つたが、その精神は依然として存在し、日清日露の役といひ、世界戦争の参加といひ、一役ごとに帝國の名聲を揚げ、遂に五大強國の班に列するに至つたのも、亦此の精神の報酬である。余は信ず、此の武士的精神は、即ち國民の特性である。帝國二千五百年の歴史をして光輝あらしめたのは、實に此の精神の賜である。併しながら、此の精神を以て武士階級の専有の如くに思ふのは間違である。此の精神は、幾多の美德を包含するけれども、一言を以て之を蔽へば、正義である。正義は人

道の極致である。故に國民は階級職業の如何を論せず、帝國の古今を一貫せる此の大精神を本體とし、將來の運命を開拓すべき科學的知識を四肢とし、全力を擧げて、内外に活動するときは、天下誰れかよく之に敵するものがあらう。

頃者、興亡史論刊行會は、興亡史論叢書第二期十二卷刊行の計畫を立て、歐米名著の翻譯を本領とせる從來の型を破つて、國史に關する一卷をその中に加へんと欲し、意見を余に徵せられた。余は曾て王公將相烈士名流の書簡を蒐集して、之を研究することの有益なるを思ひ居たれば、之について大體の立案を文學士中村孝也君に語り、君を薦めて纂述のことに當らしむることとした。君乃ち日常研究の餘暇を擧げて之に當り、つひに武家興亡一卷を著して余に示された。受て之を閲するに鎌倉時代より江戸時代に至る迄、公卿武家の文書の中より、時勢の變遷を見るに足るべきものを選んで、六十餘通を獲られ、一通

ごとに之が解説を加へて、前後の形勢に論及し、武家の興亡盛衰する所以を詳述せられた。これらの文書は、皆その人の口吻より出で、又は自筆より成つたものであるから、親しくその人に接し、その聲を聞き、その血脈に感じ、その心核に觸るゝ如き想がある。故に翻々たる小冊子ではあるが、此等の點に於て大卷鉅冊に勝ること萬々である。況や君が流暢明快なる筆を振つて、縦横馳騁の技を擅まゝにしたのであるから、忽ちにして雲を捲き風を起し、忽ちにして花笑ひ鳥歌ひ、人をして驚心駭目に違あざらしむる概がある。凡そ史に精なるものは筆に拙なく、筆に巧みなるものは史に疎なるものである。然るに、君は此の兩者の長を兼ねて居らるゝが故に、史的趣味を鼓吹し、國史教育を普及せしむるには、君の如き文學的手筆に待たなければならぬ。現代に於ける國史の教育は、如何にも貧弱である。近頃になつて漸く國史を授くる高等學校が

出來てきた有様である。國民の精神と特性とを涵養するには、國史教育を基礎としなければならぬ。然るにその教育に缺陷があれば、國民の思想に動搖を來すのは當然である。現代に於ける世界の列強は各々その國の國史教育を重んじ獨佛二國の如きは尤も力を茲に注ぐと聞いた。過去四年間に亘れる世界の大戰に敵も味方も兵食共に竭きて士氣益々旺盛を加へ聯盟會議の開かるゝや、又いづれも侃々諤々として主張すべきを主張し一步も相譲らざる底の意氣精神を示せるのは、固より當然の事ではあるが、その由て來るところを察すれば、各各その國の國史教育によつて訓練せられたる國民的精神の發現に歸せざるを得ないのである。況や我が帝國の如きは、宇内列國に比類なき名譽ある歴史を有しながら、久しく之を疎略にして置いたので、此の尊むべき國民の特性は、日に月に薄らぎ行きつゝあるのである。是時に當つて、此書の如きものが出て

國民の特性たる武士的精神の偉大なる光烈を高唱して、國民の反省を促さんとするのほ、滔々たる社會に對する一大警鐘である。

興亡史論序其ノ二

余は頃日『君子經國策』を一讀して、當時に於ける西歐諸國の割據攻戰の情態が我が邦に於ける戰國時代のそれと同一なるを見て、甚大なる興味を感じたのである。所謂戰國時代は、紛々擾々として、頭緒がない様であるが、その間におのづから一貫した潮流がある。即ち實力の競争である。いかなる者でも、實力さへあれば、小なるものは一方の霸權を握り、大なるものは天下の權を執ることが出来るのである。所謂實力とは、兵力と富力がなければ、兵力を有効に運用することが出来ない。またいかに智力があつても、富力がなければ、智力を無限に應用することが出来ない。此の三つの力を兼ね備へたものが、一方の盟主ともなり、天下をも一統するのである。此の如く實力本位の時代であ

るから、草莽匹夫の徒輩でも、實力さへあれば、王侯將相の尊榮を得ることが出来る。之に反して、實力がなければ、名門貴族も一朝にして沈淪するのである。されば、一面から見れば倫理を無視した時代であるけれども、他方から見ればこの位壯絶快絶の時代はないのである。かのマキャヴェルリはかゝる時代に際會し、戰國の眞諦を會得して、之を披瀝したのが即ち此書である。之を東洋に求むれば、六韜三略ともいふべきものである。その内容は極めて豊富であるけれども、要するに外交と兵略と治國との要訣を説明したものである。余は之を我が戰國時代に比較して、一一對論を試みたいのであるが、繁冗に渉るのを虞れて此時代に於ける二三の代表的英雄の事蹟を述べ、讀者をして任意に此書と對比考量せしむる方が、反て要領を得るであらうと思ひ、北條早雲、武田信玄、織田信長の事蹟について、此書と相發明するに足るものを摘記せん

とするのである。この三雄は、十四世紀の半より、十五世紀の半に亘つた中で、中にも北條早雲は、マキャヴェルリと全く同時代の人であるから、先づ早雲の事から述べて見よう。

北條早雲は、伊勢の人で、飄然と劍を杖いて郷關を出で、自分の妹が駿河の今川義忠の妾になつて居るのを縁りとして、今川氏の客となり、風雲の機會を覗つて居たが、時恰も好し、今川氏に内亂が起つて、義忠は殺害せられ家臣は二つに分れて相闘いだ。早雲は機乗すべしとなし、巧妙なる辯舌を振ひ、雙方を和解して忽ち内亂を鎮め、自分の妹の生んだ義忠の幼子を擁立して遂に自ら今川氏の實權を握つて了つた。されど、彼は固より之に満足せず、猶も機會を覗つて居たが、偶々伊豆の堀越御所なる足利政知の家庭に内訌が起つて政知はその子の茶々丸に殺された。そこで早雲は亂臣賊子を討伐するを名とし

て、關東の上杉定正と同盟し、堀越御所を伐つて、難なく伊豆を占領して了つた。斯く容易に伊豆を攻め取つたのは、全く上杉定正と同盟したからである。何となれば、是の時、關東の上杉氏は二つに分れ、一方を扇谷上杉と云ひ、他方を山内上杉と云つた。定正は即ち扇谷上杉である。此の兩上杉が互に勢力を争つて、干戈を交へて居つたが、伊豆は山内上杉の分國であつたので、早雲は扇谷上杉と同盟し、その勢力を利用して、伊豆を占領したのである。彼は猶も此の同盟を利用して、山内上杉を倒すべく、伊豆より箱根を越えて、關東に打ち入り、扇谷上杉を援けて、山内上杉に屬せる諸城を攻落し、その勢力を關東平野に發展した。是に於て、彼は最早扇谷上杉と同盟を續ける必要がないので、獨立の行動を取り、勝手に武藏相摸を攻略したが、茲に一の障礙があつた。それは、小田原城主の大森氏頼である。大森は扇谷上杉の部下で、

名將の聞えがあつた。この人が箱根の嶮を扼して居るから、早雲が伊豆から關東へ出入する邪魔になるので、寧ろ之を懐柔すべく、有ゆる手段を盡して、之が歡心を求めたが、氏頼は中々その手に乗らなかつた。然るに氏頼はふと病死し、その子は不肖であつたから、早雲は之に附け入つて、益々その機嫌を取つて居たが、一日、鹿狩を催はし、鹿を逐ふ真似をして、箱根を越え、俄に小田原城を襲撃して之を攻め落した。此より、彼は自由に關東に出入して上杉方の諸城を攻め落したのである。是に於て、兩上杉は相和し、共に早雲を防禦することになつて、越後の上杉氏も、亦之を援助した。乃で、早雲は、越後の長尾爲景と同盟して越後の上杉を牽制せしめ、關東の上杉と越後の上杉との連絡を絶つたので、關東の上杉は孤立無援の姿となつた。されども、關東の上杉は、猶も關東公方を奉じて居たので、關東の諸將も、その命令を奉ずるものが尠く

なかつた。乃で早雲は更に上杉と關東公方とを引き離してしまはうと思ひ、巧妙なる離間策を用ひて上杉を斥け、公方を手に入れて了つた。その後、早雲の子氏綱が、自分の娘を公方に納れ、その胎に出来た外孫を立て、公方とし、之を擁して關東に號令し、遂に關東の覇權を握るに至つたのである。而して彼はまた一方に於ては、善政を施して民心を收め、府庫を充たして富國を謀つた、その伊豆を占領するや、直ちに令して租税の負擔を軽くし、之を四公六民として、その外は一錢たりとも取るべからずと命令した。こゝに於て他國の百姓は之を傳へ聞き「我等が國も新九郎殿(の名)の國にならばや」と叫ばしむるに至つた。民心の之に歸すること此の如く武畧の他を壓すること彼が如くであるから、關東八州の間、よく之に敵するものなく、遂に關東平野を一統するに至つたのである。之を要するに、彼は外交に、同盟に、政治に、いづれも巧妙なる

機畧を揮つて、成功せざるはなく、漂泊浮浪の一匹夫より起つて、關東一統の業を開いたのは、此書に於ける、「自己の勇氣と武器を以て得たる新君主國に就いて」の一章と相映發して、興味津津たるものあるを覺ゆるのである。早雲より稍々後れて、早雲以上の雄圖を企てたものは、武田信玄である。彼が最も得意とするところは外交である。彼は外交を以て自由自在に諸國を操縦すると同時に、間諜術を用ひて、敵國の内情を知ること、敵國それ自身よりも明かである。今その一例を挙げれば、彼は父信虎と喧嘩をして、信虎を親戚なる駿河の今川氏の許に逐ひ遣り、相當の仕送りもしなかつた。されば、當時は勿論のこと後世までも、不孝の汚名を被つたが、その實は、父子申合せて、かゝる狂言を仕組んだのである。その譯は、彼の領國たる甲斐信濃は、四方とも山に圍まれてゐるので、一海灣を得て、發展の路を開かうとした。それには駿河

に出るのが尤も便利であるので、わざと信虎を駿河の今川氏へ逐ひ遣つたのである。乃で信虎は今川氏の内情を精探して、その老臣等を味方に引き入れ、機熟するを待つて信玄を導いたので、信玄は兵を率ゐて駿府に打入り、難なく駿河を占領して了つた。此の如く彼は先づ敵國の肺腑に喰ひ入り、然る後に兵力を以て之に臨むのであるから、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取るといふ勢で、遂に旗を京都に進めんとしたが中途にして病死し、將に演せられんとした壯絶快絶する一幕は、閉ぢられて了つた。されど、彼が海陸に於る兵術は、後代までも武家の模範と仰がれたのである。彼が駿河を占領するや、直に海軍を組織した。その海軍は、そのまゝ徳川氏に屬し、明治維新にまで及んだのである。故に我が邦に於ける海軍史上には、信玄に對して、特筆大書すべき價値がある。その陸戦に於ては、最も騎戦に長じた。即ち騎馬隊を以て敵軍を蹂躪す

るのである。而してその戦術も巧妙を極め、敵陣の位置が、我軍に取つて不利なる地點にある場合には、巧に之を牽制して、我軍に有利なる地點に敵陣を廻轉せしむるのである。三方原の役に、徳川家康を濱松城より三方原へおびき出したるが如きは、即ち此の戦術を應用したのである。家康が關ヶ原の役に、西軍を大垣城から關ヶ原へおびき出したのも、全く信玄の戦術を學んだのである。信玄が峽中の盆地に起り、鹿を中原に逐ふに至つたのは、内治に、外交に、妙機を發揮せしむるに由ることは勿論であるが、深く軍事を研究して、用兵の妙諦を得たからである。此書に於ける「君主の軍事に關する本務」の一章は、恰も信玄の軍事を説明せる「甲陽軍鑑」を読むが如き想あらしむるのである。信長に至つては、革新的人物である。彼は有ゆる點に向つて革新を企てた。而して天下よく之に敵するものなきに至つたのは、主として軍隊の革新にある

のである。彼が鐵砲隊を組織して、之を先頭とし、先づ鐵砲を放つて敵軍を潰亂せしめ、次に槍隊を以て突貫するのである。故に長篠の戦に武田氏は得意の騎馬隊を放つて、信長の軍を蹂躪せんとしたが、信長は柵を結んで、その内に鐵砲隊を配置し、敵騎を近距離まで引き附けて、一斉射撃をやらしたので、敵隊は人馬ともに立どころに倒れて、武田氏の老臣宿將は、大抵討死して了つた。武田氏の滅亡は、實に此の一戦に原因するのである。其の當時は、鐵砲が傳來してより既に三十年を経て居たのであつたか、各地方の國主が、猶ほ舊武器たる弓矢を用ふるものが多かつた。されど、信長は専ら新武器たる鐵砲の操縦隊を訓練して、之を軍の主力としたので、向ふところ撃破せざるはなかつた。また、毛利氏と攝津の西上で戦つたとき、毛利のために戰艦を焼かれたので、信長は鐵張りの軍艦を造つて之に應戦した。それは如何なる構造であつた

か分らないが、この時代に、鐵艦を造つたのは、驚くべき創見である。彼はかかる新武器と新戦術とを以て、諸國を征服し、天下一統の端を開いたのである。此書に於ける「残忍と仁慈、君主は愛せらるべきか怖れらるべきか」なる一章は、信長の峻厳冷酷なる性格を評論して之に同情し、恰も彼の爲めに筆を執つたかの如き観がある。焉ぞ知らん信長は其の思想上に於ても其の他の有ゆる點に於ても、全然何等交渉なき萬里の海外に於て、此の如き知己を得やうとは、また一奇といはなければならぬ。

以上述べたところは、我が戰國時代に於ける實力戦争の結果として、外交に戦術に政治に異常なる發達を遂げた一斑である。而して早雲も信玄も、東西萬里の海洋を隔て、マキヤヴェルリと共に、戰國時代に對する眞諦要訣を得てその軌を一にせるのは、何故であらうか。蓋し往昔に在つていづれの邦國も、

戰國時代を經過せざるはない。而して後世になるに随つて、追々その範圍が擴大せられて、今日では、世界の戰國時代となつたのである。故にその形式はいかに變化しても、その内容は同である。即ち所謂實力本位の世界となつたのである。されば、過去に於ける戰國時代の歴史を回顧して、將來に於ける成敗存亡の推移を考ふるのは、今日の急務である。

マキヤヴェルリは深く時世に慨する所あり、經驗と讀書により得た國家の盛衰興亡に關する夥多の教訓を一小冊子に録し、之を君公に献呈するに當り、寶玉以上の高貴なる献上品であると言つて居る。今松宮學士が興亡史論刊行會を創立し、先づ此書を選んで我が社會に薦むるのも、亦無上の高貴なる贈りものであるまいか。

英 雄 と 豪 傑

英雄の細心と大膽

(一) 英雄の周到なる計畫

我國に於いて英雄中の英雄とも云ふべき頼朝の如き、また秀吉の如き、孰れも單身より起りて天下を取つた人であるので、一寸見れば單に武力を以て譯もなく天下を征服したかの如く思はれるが、併し單に武力のみを以て贏ち得たのではなく、それは平生よりして周到する計畫と、周到甚大なる注意を以て、そうして是れなら大丈夫だといふ處の方針をたて、然る後に動いたのであるからして、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝つといふことを得たのである。

(二) 小事にも極めて細心の注意

それに就いて一二の例を擧げて見ると、頼朝が初めて旗を擧げやうとした時、伊豆の國の目代山本判官兼隆の館を攻めた。此の人は平家方として暴威を振つて居たので、先づ手始として彼の館を襲ふたと云ふことで、間者をやつて彼に接近せしめて、數日間彼の館に逗留させて、共に酒などを飲むで談笑して居らせて、その間に館の内の様子から、其周圍の山川村里などのこまかい道筋高低までも精細に地圖を取つて、それを彼の間者は持ち歸つて頼朝に見せた。吾妻鏡に此の事を書いて、その地圖の精密なることをば記して殆んど其の境に臨めるが如し、とある。して見れば餘程詳しい地圖であつたと思はれる。そこで頼朝は北條時政を招いて、此の地圖に就いて攻撃の方法を研究して、然る後これ

を襲ふた處が、果して一撃の下に攻め落して兼隆の首をあげた。これぞ頼朝が覇業を立てる第一着の戦ひである。彼の館の如きは城ではなく、非常に要害をこしらへてあると云ふやうな處でもないから、是等は唯だ一撃しても攻め落されさうな者である。それにも拘はらずかやうに精密なる地圖をこしらへ、攻撃の手だてを研究したと云ふことは、頼朝の事に當つて注意の如何に周到であつたかを窺はれるのである。區々たる兼隆の館を攻むるにすら此の如き注意を拂つたのであるから、況んや是より天下を經營しやうと云ふことに至つては總て此の通り周密なる計畫の下に事業を遂げたのである。

(三) 頼朝の機略

尙ほ今一つの例を述べると、頼朝が略ぼ平氏を討平しての後、更に奥州征伐

を企てたが、此の時も先づ豫め間諜を奥州へ遣はして奥羽の形勢をすつかり偵察させ、然る後三道より兵を進めて藤原秀衡の平泉の館に向つて大包围の形勢を作つて進むので、さしもの秀衡も防禦し兼ねてとう／＼攻め落されて了つた。是れも地理の研究と云ふことが充分に出来て居たからである。以上は單に頼朝が用兵の上に於ける計畫に就いて注意の周到であつたと云ふ例に過ぎないが、此の後武家の制度を定めて寸壤尺土も政教の屈かない處のない様になつたのも總て此の筆法を以て豫め周密なる研究をやつて事を爲して行つたのであるからして、それ故に彼の爲す處は着々として効を奏し、殆んど失敗と云ふものがなくて成功したと云ふのは、畢竟彼れの細心なる結果であらうと思ふのである。

(四) 攻戦に地理の研究

それから秀吉なども矢張り同じであつて、秀吉の如きは殊更豪放闊達の人であるから、一向こまかい事には頓着しないかの如くに思はれるけれども、これ又たなか／＼さうではなく、彼が紀州征伐をした時の如きも、豫め先づ偵察を放つて詳細なる地圖を作らせた。紀州と云ふ處は殊に山川の紛糾して居る處であつて、餘程地理が面倒であるから殊に意を用ひてかう云ふ方法を取つたと思はれる。山谷の形勢、海岸の道筋並に舟つきのよき場所、または陣取りに便利なる地點と云ふやうな處をば殊に詳しく圖に作らせて、其の上にその土地の案内者を雇ふて地理の研究をし、そこで初めて兵を發して紀州へ討ち入つた。此時根來の僧徒などは非常に反抗したのであるが、然し意外の處から秀吉の兵

が入つて来たので、遂に防ぎ切れず、或は遁れ、或は降ると云ふことになつた根來の如きは其の嶮岨を頼むで秀吉を侮つて居た、處が案外氣の付かぬ處から攻め入つたから狼狽して譯なく破れて了つたのは全く地理の研究が行き届いて居た結果である。

(五) 軍事探偵政略

又秀吉が小田原攻めの時、即ち關東征伐の時分には更に關東全體の地圖を作らせて之に依つて諸將を集めて部署を定めたといふことである。その外また部分分の地圖をも作らせたらしい。即ち伊豆の韭山の城を攻むる時などは韭山の繪圖を出して左右の者と夜半まで攻撃の方法を研究したと云ふことである。して見ると一つの城に就いても精密なる地圖を作つた者と思はれる。關八州の

強大を以て瞬く間に秀吉に征服されて了つたと云ふのは、是れ又秀吉が周密なる地圖の研究が届いて居た結果が與つて力あつたものと思はれる。後に至つて朝鮮征伐の師を出すに及んでも、無論多くの偵察を放つて先づ地理の研究をさせ、地圖を作らせ、然る後に始めて軍を發したのである。

此の如く頼朝と云ひ、秀吉と云ひ兵を動かすまでに各方面に於いて周密なる計畫をたて、然る後初めて兵を動かしたのであるから、それでいつも此の兩雄ともに失敗と云ふことがなく遂に群雄を征伐するに至つたと云ふのは、全く豪放大膽と云ふ點にあらずして、寧ろ細心の點に成功の根柢はあつたものと思はれるのである。右は單に地理上の研究に就いての話であるが、これに準じて各方面にも斯う云ふ話があるのである。それを一々擧げることには煩はしいから、その一を以て他を推して貰ひたい。

(六) 古英雄の世界地理研究

秀吉の頃に至つては世界地圖の屏風と云ふものが非常に流行つて往々今にその遺物が存して居る。これは日本の國民が世界に向つて發達しつゝあつた其の影響であらうが、併しまた秀吉の朝鮮征伐と云ふものは、やがて支那征伐になるのである。支那征伐と云ふものはやがて南蠻征伐になるのである。南蠻までも征服しやうと云ふ雄圖を抱いて居たことはその左右の者に語つた事がある。であるからして世界の大勢に注目したので、さてこそ世界地圖の屏風と云ふものも出來たのであるまいか。彼が海内を統一するに就いて、先づ地圖の研究を基礎として居たのから推して見ると、世界地圖の屏風は世界に雄飛しやうとする彼の研究の一つと見ても宜からうと思ふが惜しい哉、天がかれに年を

かさずして志を齎らして地下に入つて了ひ、世界地圖の屏風のみ空しく存することゝなつた。

(七) 部下の一舉一動に細心の注意

さてまた秀吉が此の如く用意の周密であつたと云ふことは基づく處がある。これは全く織田信長に學んだ事と思はれる。信長と云ふ人は非常に粗放な人のやうに思はれて居るけれども、處が何でも非常な細心の人である。彼が部下の將士を教育して行く仕方と云ふものは非常に細かい。其の一例を云ふと嘗て次の間に控へて居る小姓を呼んだ。小姓は聲に應じて出て來た處が何等の用事も命じない、仕方がないので小姓も其儘引き下つて了つた。そこで又た更に手をつて外の小姓を呼んで、出て來たがまた用事を命じない、そこでまたも空し

く引き下つて了つた。更にまた第三の小姓を呼んだ。すると前の如く用を命じない、すると其の小姓は引き退る時に傍らに塵が落ちて居たので、その塵を拾つて下つた。そこで信長はそれを呼び止めてこれを褒め、士と云ふものはふだん氣轉注意と云ふことが肝腎である。貴様はその點に於いてよく意を用ひた。士と云ふものはさう云ふ風に細かい處に始終注意しなければいかぬぞと言つたと云ふ。

(八) 平素に火急の用意を怠らす

又信長は出陣をする毎に草鞋を一足刀の鞘へ結び付けて出た、是れは何ぞの不意の時に急に草鞋がないと云ふと非常に事を缺くことがある。この時の用心の爲めに常にこれを帯んで居たと云ふ。嘗て越前の朝倉征伐をやつた時、部下

の兼松某と云ふものが奮闘して敵の首級を取つて更に信長の實檢に備へた。處が信長その功を賞して、フト彼を見ると彼は素跣で居たので直様刀の鞘に結んで居た草鞋を取つて彼に與へ之を穿いて再び働けと言つた。そして其時信長の云ふには、此の方弱年の折から必ず一足の草鞋を下げて危急の場合に事を缺かぬやうにして居ると言つたと云ふことであるが、これは小さい事であるが信長の注意深かつた事が分る。猶ほかう云ふやうな話が多くある。右はその一例に過ぎないが、斯んな風に信長は非常に緻密であつた、秀吉は全くこれに薫陶せられたのである。

(九) 英雄の細心と大膽

これを要するに英雄と云ふものは、大抵は細心の方面と大膽の方面と此の二

つを備へて居る。それが互に用を爲して行くので、大事業が出来て行くことと思ふ。彼の北條早雲なるものは匹夫から起つて子孫が關東八州を領するに至り五代の起業を開いた人であるが、あの人はかう云ふ風であつたと云ふ、即ち平生は針程のものも粗末にしない。然し又これは使はなければならぬと云ふ時は玉でも砕いて了ふと云ふ人であつたと云ふことが、朝倉宗滴と云ふ人の早雲を批評した言葉だが、此の早雲は宗雲と同時代でよく早雲の性格を簡單に言ひ盡してあると思ふ。針程のものも粗末にしないと云ふのは餘程平生細かいけれども、いよ／＼となると玉をも砕くといふ勇斷力を持つて居たと云ふことが分るこれは單に早雲に對する批評のみならず、一般の英雄と云ふものが必ずさうだらうと思ふ。必ず一方に針の如き細かい處がある、一方には玉をも砕くと云ふ勇斷がある。そこが英雄の英雄たる所以であらうと思ふ。秀吉も然り、頼朝も

然り、他の多くの英雄も皆さうで、宗滴の言葉は餘程味ふべきものであらうと思ふ。

織 田 信 長

(一) 粗暴にして周密

信長の少年時代は非常に荒々しい氣性で、家來のものも、其亂暴には、もてあまして居つた。

随つて其服装なども無頓着で時には異様な服装をして、長刀を帯び従者には又長刀を帯びせて、市中を濶歩して得々として居つた。

かつて京都見物に出かけた時などは、餘り長い刀を差して居つたから其鞘が地を曳きづるので、鞘の尖端へ小さな車をつけて、がらく／＼ひいて歩いたとい

ふ事である。

これはかれの奇矯の舉動の一つを擧げたに過ぎないが、これを見ても平生が推しはかられる、そこで其輔佐なる平手政秀が大いに心配をして、このままににおいては自分が守役として、輔導の任を盡したとは云へぬと云ふので屢々諫めたがなかく聞き入れない。其處で政秀は遂に意を決して諫書を奉りて切腹してしまつた。

さすがの信長も、政秀の誠忠に感じたものと見えて、それ以來の舉動はがらりと變つて、全く別人の様になつて、名古屋に政秀寺と云ふ寺を建立して政秀の靈を慰めた。其の寺は現に存して居る。

かやうな舉動な人であつたから、餘程猛烈性の人であつたに相違ない。それにかやうな人は兎角武斷一方であつて、緻密と云ふ點に於ては缺けるものであ

るが信長はさうでない。

一面に猛烈な點があると同時に又一面に非常な緻密な所がある。此の緻密な處が却つて彼れをして大事業をなさしめたのである。

嘗て安土に城を築いた時其の城の記文、即ち安土山の記と云ふものを作らせようとして、策彦と云ふ和尚に命じた。策彦は當時天龍寺の長老で、足利時代には二度も明に渡つた人で、當時の禪僧中、第一の人であつたけれ共策彦はこれを辭退して「文章に於いては私よりも技倆の優れたものがある。彼の南化和尚である。彼れに御命じなすつては。」と南化和尚を推薦した。信長は其言葉を入れて、南化和尚に命じた。

南化和尚は命によりて「安土山の記」一篇を作つた。其記文は南化の諸録たる「虚白録」に残つて居るが當時としては優れた文である。

そこで信長も大いに喜んで、賞を行ふと云ふ事になつて、褒賞として南化和尚に銀百枚策彦和尚には倍額の銀二百枚を與へた。骨を折つて文章を作つた南化よりも、却つてただ南化和尚を推薦しただけの策彦を厚く賞して南化には薄かつた。つまり南化の技をあらはす事の出来たのも策彦の御蔭である、策彦あつて始めて南化が現れたと云ふので、却つて策彦に厚くしたのであるが、これはなかく進んだ考へで凡人の及ばぬ處である。

信長の人を使ふ風は、凡べてかくの通りであるから信長に事へて居る人は何れも知らず識らず奨励心を起して、骨身を惜まず働く。又緻密な處迄見て居つて、抜目がないから、従者の凡てが蔭日向なく、あらん限りの力を出して働いたのである。

しかしながら従者にして少しでも間違があつたり、不正があれば容赦もなく

謹責する。されば柴田の如き、秀吉の如き人でも、如何なる重臣でも、遠慮會釋もなく謹責もすれば、苦言も云ふ、彼の光秀なども、衆人の前で謹責せられた爲めに、叛逆したと云ふのも、信長が常にかういふ風のやり方であつたからであらう。

(二) 嚴酷にして寛大

信長は一方に如斯く非常に嚴酷の處があると思へば、又一面には寛大の處もある。

或時公卿と北面の武士と、もの争ひがあつて、訴訟になつた。そこで信長の奉行が、それを裁判して公卿に理あり、武士に非があつて武士の敗訴となつたけれ共武士は殘念でたまらず、内々に織田右馬之助に頼んで是非今一度裁判を

しなほして貰ひ度いと嘆願した。右馬之助はこれを信長に告げた。信長はこれ
を聞いて、北面の武士が右馬之助に賄賂を贈つて、嘆願したのであらうと、そ
の事情を察した。けれ共譴責もせず「一先づ立歸れ、その事は重ねて考へやう」
と座を立つて「かような僻が事を聞いたのも畢竟自分の不明に由る」と嘆息さ
れて、(錢辨嵌められけるか右馬之助、人畜生とこれをいふらめ)といふ狂歌の
一首を作り右馬之助に送つた。右馬之助は一族中の老年者であつたから、老を
敬して別に譴責もせずかかる風流にすましたのであるが、右馬之助はこれを開
いて憂憤して死したといふ事である。

以上は信長の一面は武斷的であるが、一面にはまた緻密なところがあつた事
と、又一面非常な嚴酷であつて、一面には頗る寛大な點を現はして居る一例で
あるが、次に信長の經濟方面のやり方に付いて見ると信長は、なか／＼經濟家

であつて、國元の倉庫には澤山の錢を蓄へて置いたもので、「あまり長い事置
と錢の貫が朽ちてしまふから貫を取り換へる様に」といふ書狀が残つて居るの
を見ても想像が出来る。かういふ風であつたから、他から見ると吝嗇の様に思
はれる程であつた。

けれ共決して吝嗇ではなかつた。伊勢神宮御造營の時など、澤山の費用を献
じて、その上に御入用次第何程にても差出すと云つてゐる。

これを見ても、信長が經濟家で平常無駄の事には金錢を遣はず、遣ふ時には
惜まずいくらでも遣つたといふことは察しられるではないか。

(四) 信長の愛誦した小

最後に信長の性格が最もよくあらはれて居る一例を挙げると、尾張の清洲の

近傍に天永寺といふ寺があつて、天澤と云ふ住僧があつた。

其の僧が嘗つて關東へ下向した折り、甲州へ行つて、武田信玄に謁見した。其時信玄は「貴僧は尾張の者だといふ事だから信長の様子は知つて居るであらう有のままを話せ」といふた。すると天澤は信長の平生を話した其内に斯ういふ事がある。

信玄が信長の最も好きな物はなんであるかと尋ねた。其の時天澤は「清洲の町人に友閑といふものがあつて舞をよくするので、それを再々呼び出しては、舞をまはせて御覧になり、信長自身も舞をまはれるが、それがいつも唯一曲である。その一曲は教盛の曲である。

それも教盛の謠の中にある、「人間五十年、天下の内をくらぶれば、夢幻の如くなり、一度生を得て滅せぬ物のあるべきぞ」といふ一節だけを口吟さんで舞

はれるのみである。又小歌を好きでうたはれるが、それも唯一つで、

「死のうは一定、しのび草には何をしよぞ、一定かたりを残すよの。」といふ歌ばかりで、此の歌を常に口吟さんで居る」と語つて居る。

これ即ち信長が平生に於ける愛誦の句と見える。さればこそ、桶峽間の戦には今川義元の軍既に尾張の境に攻め寄せて、鷺津丸根の二城へ攻めかかつたといふ、注進が清洲へ来た。しかもそれは夜中の事であつた。その時信長は家老を相手に浮世話をして居つた。處が此の警報を聞いて少しも驚く様子もなく浮世話を續けて居る。暫くしてもう夜が更けたから一同歸宅せよといふて何の相談も無く歸へしてしまつた。そこで家老の面々はかやうな警報に接して居るに、何の御相談もなく歸へれと云ふのは、もはや我主君の滅亡であると嘆息して、歸へつた。間もなく、又鷺津丸根の二城は既に陥つたといふ第二の注進が

來た。

その時に信長は俄に立つてかの敦盛を舞つて、人間五十年の句を吟じ終つて單騎鞭を揚げて出陣した。従ふ者僅に五騎、主従六騎で熱田まで一息にかけた。

それから鷺津丸根の方面、或は鳴海の方面に満ちて居る敵軍には目もかけずそれらの敵軍の間を駆けぬけて今川の本營目にかけて突進し、義元を打つてしまつた。本營が敗れ大將が打たれたので今川の大軍は總くづれになつた。

初め今川の軍が鷺津、丸根の二城を落した時、義元は之れを聞いて心地よしと云つて祝盃を舉げ謠曲一番を歌つたさうである。その時、信長の方は二城の落ちたのを見て敦盛の謠曲を吟じたのである、兩方の大將が同時に謠曲を吟じたのは面白い對照である。

一方は勝を聞いて謠ひ、一方は負けを聞いて謠つたのであるが、勝つて謠つた方は敗れて、敗れて謠つた方が勝つたのは、青年諸君が三度意を致すべき處である。

此の戦の形勢を見るに今川の大軍には、とても敵する事が出来ぬ。如何にしても對等の戦争は出来ぬ處であつた。そこで信長は一死あるのみと決心したのだ。さればこそ敦盛の舞を舞つて出陣したのは、決死の心であつたのである。即ち『死のうは一定』の小謠を實現したのである。然かも、此の大決斷があつたからこそ未曾有の奇捷を博したのである。信長が遂に覇業を成したのはひききやう敦盛の一曲と、死のうは一定の小謠の精神を發揮したものである。併しながら信長の如く、一面に細心周密の處が有つて初めて此の果斷が役に立つたのである。

信長の茶の湯

(一) 茶の湯の再興

世間一般茶の湯と云へば、すぐに東山時代を聯想するけれども、近代に於ける茶の湯は實に信長に依つて再興せられたのである。若し信長の如き人が出なかつたならば、恐らくは戦亂と共に此の道も廢れて仕舞つたであらう。而して今日では、苟くも、茶道の心掛けなければ、交際場裡に入ることが出ない位にまで流行して居る、然るに此道を再興した信長を回顧するものがないのは何故であらう。恐らくは其末を追ふて、其の本を忘れて居るのではあるまいか。そこで余は少しく信長が茶道に對する態度と、その士風に及ぼした影響とに就いて述べて見ようと思ふ。

今日一般に茶道の宗主として仰いで居るのは千利休であるが、利休がかかる權威を百世の下に有するに至つたのは、何故であるかと云へば、それは全く信長の引立である、信長の引立がなかつたならば、利休もあれほどには顯はれずに仕舞たであらう。利休の家は、和泉の堺浦の豪商であつた。信長が、足利義昭を奉じて、京都に入つて、幕府を回復するや、早やくも堺浦に着眼した、それは何故かと云へば、當時堺浦は、畿内第一の繁盛で、富豪が多かつたから、信長は早くも此に奉行を置いて、政務を執らしめた、之等の關係から、堺浦の紳商と云ふべき、利休だの、納屋宗以だの、天王寺屋宗久だのを召出したのである。此輩は何れも豪商であると同時に、茶匠であつたのである、全體堺浦と云ふ處は、當時日本に於ける最大の貿易港であつて、内外の貨物を吞吐する大埠頭であるから、所謂貿易商なるものが、大厦高樓を構へて、華奢豪遊を事と

せる結果として、茶三昧に入つたので、利休の如き名匠が輩出したのであらうと思ふ。

(二) 茶器と茶入

信長が京畿の政を執るや、使者を堺浦に遣して名物の茶器を求めさせ、富士茄子の茶入雁の繪などいへる名品を召しよせ、その持主には大金を與へて之に酬いた、その後、天王寺屋宗久より、梨子の繪、油屋常祐より柑子口の茶入などいへる名物を献上させた。これらの品は、いづれも、呂宋、高麗、支那などより輸入せられたものである。而して、堺浦は即ち其の輸入地であるので、天下の名物は、多くは此地から流傳するのである、併しながら、天下無雙の勢力と地位とを有せる信長の如きものが出でて、茶道を興すと同時に之等の名物を愛翫しなければ一世の風尚を造ることは出来ないのである。

(三) 武の半面に風流

信長の茶道を好んだのは、徒らに風流を弄んだのではない。蓋しその禪理を寓し、志を高くする上に於て多大の興味を有つて居たことと思はれる、故に信長は武の一面を有すると同時に、文の一面をも備へてゐたのである、其の一二の例を擧げて見ると、茲に稻葉一鐵と云ふ人があつた。信長に對して陽に服して陰に叛かんとするので、信長は伴り招いて、茶を饗して、之を殺して仕舞ふつもりで、近士三人にその接伴を命じ密かに七首を懷にさせ、機を見て之を刺せよと云つた、やがて、一鐵は招きに應じてやつて來たので、三士は出で迎へて、茶席に案内し、床の間に掛けてある畫幅の讀を讀まんことを請ふた

そこで一鐵は從容として之を誦した、信長は壁を隔てて之を聞いて、いたく感心した、謀殺の事情を打ち明けて、之を謝したので一鐵もこれより信長に心服したと云ふことである。又、信長が甲斐の國を討つて、武田氏を滅ぼしたとき瀧川一益を上野の厩橋城に置いて關東を鎮めしめた。即ち東國の都督として東方の軍政を任したのである、一益にとつては無上の名譽である、然るに一益は京都の一茶友に書を寄せて、「此度武田を亡ぼしたれば若し信長公より何か望みもあらうと御尋ねあらば小茄子(茶入の名器)を拜領したいと申し上ぐべき覺悟なりしに、左なくてかかる遠國(上野)に置かせられ、茶の湯冥加はつき候」と云つた。之れは諧謔の語氣を帯びては居るが、名譽ある關東の都督よりも眇たる一小茄子を望まんとしたのは、何んと超然高潔の風を帯びて居るではないか、これみな信長の茶趣味の及ぼした影響である。即ち茶趣味よりして、將士

の文學を尊重したのである。秀吉も信長の感化を受けて茶道を好んだことは、寧ろ信長以上であつた。従つて利休の輩を寵遇したことも、信長以上であつた。そこで利休の輩は、數多の諸大名を門人として、聲望天下を壓するに至つた。而して秀吉の茶は、四疊半式の小さなものでない、嘗て京都の北野の松原に於いて大茶の湯なるものを舉行した。其の時に洛中は勿論のこと奈良堺浦等に左の如き高札を建てた。

來る十月朔日(天正十三年)北野松原に於て茶湯を興行せしむべく候、貴賤によらず、貧富に拘らず望の面々は來會すべし、一興を催すべく候美麗を禁じ儉約を好み營み申すべく候、秀吉數十年求置し諸道具かざり立て置くべく候、望み次第に見物すべきもの也。

と云ふ告示を出して、思ひ／＼に北野の松原なる緑の蔭だの芝生の上だの、

又は唐傘一本の下などへ茶店を張り茶具を列べて、互に主客となつて一時の偉観を呈したと云ふ事である、何んと大きな茶の湯ではないか。

その後秀吉は伏見に學問所と云ふものを建て、茶道の講筵を開いて上下貴賤を問はず、何人といへども、来るものは賓客として之を遇し、意見あるものは、忌憚なく開陳せしめた。當時は階級の嚴しい社會にも拘はらず、平等に之を待遇したのは、茶道の眞髓より之を得たのである、且つ學問所に於て、此道を講ずるのを見ても、明かに茶道よりして學問に入つたので全く信長と歸趣を同らしてゐるのである。

之を要するに、信長も、秀吉も、茶道を賞翫した結果として偏武的弊風を化して、文雅の風尚を作り、秀吉の如きは、學問所を建て、茶道の奥義を講究せしむるに至つた、若し天が秀吉に年を假したならば所謂學問所は當に茶道

を講ずるに止まらず、必ずや天下文教の基礎を開くに至つたに相違ない。是に依つて之を觀れば、信長秀吉の茶道は、區々たる末技を賞翫するのみでなく實に此の道を以て、治道に裨益したのである、安土桃山時代の特色として、風俗に、建築に、雄大活潑の中に高尚温雅なる風韻を存するのは、蓋し又茶趣味に淵源するのである。

禪尼の命請

(一) 馬上十三歳の頼朝

左馬頭兼播摩守義朝に従ひ、武將八騎と共に東國に遁れ行く右兵衛佐頼朝は五畿七道の草木も打ち靡かしたる程の猛者であるが、年尙は僅かに十三歳の少年である。

晝と無く夜となく馬上の旅を続け、六波羅の合戦以來一睡の夢だも結ばぬので、身體の疲労は非常なものである。はては疲れに堪へで、睡眠を催ふし、草津の邊りで、一行にかけ離れてしまった。少時ありて、ふと眼を覺し、四邊を見渡せば、同行者の一人の姿さへ見えなかつた。無月の空に燦たる星は、銀砂子をまいたやうにきらめいて居る。彼は唯だ馬の行くにまかせて只一騎心細くも深夜の道を辿り辿つて、辛と森山の驛に入つたのである。夜はもう餘程更けて居るのに、只一軒まだ眠りに就かぬと見えて、語りさざめく人の聲がする。素より頼朝は遁れ行く身であるから、風に音する草木にも心を置く。何事をささやき合ふかと、馬上ながら耳を澄ませば、家の内から賑かな話聲が聞えて來る。

『今宵斯うも夜更けて、先刻程から馬の蹄音の聞ゆるのは、必定落人の通るの』

であらう。皆なの衆何うちや、撃ち留めて、六波羅殿の恩賞に與からうではござらぬか。』

頼朝は聞くよりぎよつとした。さては我等を捕へやうとの相談らしい。いやぐづ／＼しては危険である、と馬の足を掻き早めて行き掛つた。すると此時家の内からドヤ／＼と人の出て來る氣配がするかと思ふと、源内兵衛真弘と名乗る者が多くの輩と出て來て、頼朝の馬の轡に取り付いた。

『見るどころ落人であらう。六波羅よりの御觸れに依り、我等は道に撃ち留めんと、斯くは待ち伏せたるぞ。』と云ふや、長刀を持ちたる多くの者共は、頼朝を前後左右から取り巻いてしまった。

『若年なれども、汝等の手にいかで撃ち取らるべき、其處退け。』

頼朝は腰なる刀を抜く手も見せず、轡にしがみ付いて居た真弘の頭上から、

電光石火の早業で眞二つに斬り割つた。眞弘の仆れて死するを見ると、他の一人が、

「若輩なれど油断はならぬ奴ちや、各自取り遁しめさるな。」と長刀振つて撃ち向つて来た。

「應！」

續いてこれも長刀を振つて来た。頼朝は心得たりと、對手の隙に斬り下せば二人の者は急處を斬られてドツと仆れた。之を見て怖氣たのであらう、もう近寄つて来る者はない。此時頼朝は、馬の鎧に一履呉れて、森山驛を馳せ過ぎ、一氣に野洲の河原へ出たのである。

(二) 雪路に迷ひ込む

河原へ出た頼朝はなほ心に怠りなく、馬を急がして行くほごに、遙かの方より此方をさして驅け来る馬蹄の響が耳に入った。やがて近づいた武士に、

「此方に來られるは何方でござるか。」と、問ひ掛けた。

「さう云はるるは佐殿にてはおはさぬか。」と彼の武士が答へた。互ひに近寄つて見れば、頼朝主従である。

「汝は正家か。」と、頼朝もほつと安堵の息をついて云つた。

「正家でござりまする。篠原堤の所にて、佐殿の在しませぬに氣が付き、左馬頭殿を初め、皆な非常に心配をいたし、某がお捜しに參つたので御ざる。まづは御無事で何より目出度うござりまする。」

「六波羅以來馬上一睡もいたさぬに依り、知らずに睡眠いたし、一行に後れて心配を掛け、相濟まなかつた。」

兩人打ち連れて、程なく義朝の一行へ追ひ付く事が出来た。

頼朝は後れたるあらましを話し、森山驛にて源内兵衛真弘等が六波羅の命を受けて非常線を張り、道を遮り、撃つて掛つたのを、斬り抜けて来たことを話すと、義朝はにつこど笑み、

「勇ましい働き、出来たのう。」

と我が子の勇壯をいたく感賞した。

鏡の驛を過ぎ、不破の關に差し掛らうとしたが、此の關には義朝等の東國に行くのを捕へやうと、嚴重な非常線を張つて居ると云ふ噂を耳にしたので、義朝の一行は道を小關に取り、小野の驛に出で、東海道筋を北に折れ、右に折れ海道を右手に東國に下ることにした。ところが此の方面は積雪が深く、とても馬に乗つては通行が困難である、甲冑を脱ぎ身輕にしなければ歩行が出来ない

其處で一行はそれ／＼仕度をして、丈餘の雪路を辿るのであつた。頼朝は馬に乗つて居たならば、他の人々に遅れはしないのであるが、十三歳の年少者で、しかも雪路を徒歩するのであるから、とても共に行く事は出来ない、遂に又もや一行に後れて了つた。

(三) 青慕の驛の奇遇

積雪のために父義朝の一行に後れた頼朝は、小平山寺に迷ひ込み、遂に淺井の北郡の尼寺を寓居と定めて、一ヶ月程の日子を茲に費した。漸く雪も消えかけたので、此の尼寺を立ち出でた。之れから父義朝の後を追ふて行き着かうと云ふ目的である。義朝の其後の動靜は果して如何、義平、朝長の諸兄のことも氣に掛つてならない。けれども、父の一行が美濃に赴き、青慕の驛の大炊と云

ふ女主の豪家に居るのを噂に聞いて知つて居た。大炊は義朝の妾であつたがその娘の延壽と云ふのも義朝の愛を受け一昨夜又を擧げて居たので、頼朝は先づ美濃の青葙の驛に道を急いだ。されど頼朝はまだ一度も其の家を訪ねたことはない、又た道も何れを行つてよいかも知らなかつた。道すがらそれを聞くべき由もない、ただ尼寺にて聞いて来た方向を辿つて、谷川のほとりを下つたり山を踏み分けたり、また谷川に沿ふて下つたりして行つた。川は次第に廣くなり道行く人もだん／＼繁くなつて来た。

疲れた足を早めて、道を急いで行くと、何時か道に迷つて仕舞つた。頼朝は途方に呉れて居ると、川に網を投げ入れて居た一人の漁夫が、それを見て、『お見受け申したところ、道を迷ふて御座ると御察しいたします。して貴方は御武家と見えますが、此の山里に御武家の御出でなさるは至つて珍らし

いこと、もしや人目を忍びなされる御身でも御座らば、お隠しなく仰せられませ、此の漁夫が志しなさる所へ送つて進ませます。』

漁夫は至つて情の深い男であつた。頼朝は、欺き騙するものとも思はれなかつたので、

『さればお察しの通り、馴れぬ道に迷ひ何れに行つてよいやら、ほと／＼途方に暮れ申した。實は青葙の驛に行かうと思ひ、徘徊うて居つたところござる。』と頼朝は率直に云つた。

『さやうなれば私が送り進めます程に、必ず御案じなさるな。しかし此の邊りは六波羅殿よりの御達しに依り、旅する武家は厳しう詮議されます程に、その御姿にてはとても通れませぬ。御姿を變へなされでは。』と親切に教へて呉れた。頼朝は茲で女の姿に變へ、太刀は菅の葉で苞つゝみの荷物に造り、漁夫が

擔いで行くことにした。

「こゝから青幕の驛へは餘り遠くもござりませぬが、道路は随分紛はしく、それに危険の場所もござりまするから、私が女を連れた體にして御送り參らせませう。」

頼朝は漁夫の親切を大に喜んで、

「汝の情け辱けなう存じる。」と、心から感謝した。

馳て漁夫が道案内をして、幾つかの峯や谷を越して青幕の驛に着し、大炊の家を訪れた。

「大炊殿の住家は此方でござるか。」

家の内から出て来た延壽は、

「さやうでござりまする。何れの方におはしまするか。」

見知らぬ少年の訪れに、不審るのも無理はない。

「我れは義朝の子頼朝でござる。」と名乗つた。それを聞くと延壽の喜びは此の上もない、直ぐ座敷に招じた。そして夜叉御前を召して、

「汝の兄上様ちや。」と、紹介した。頼朝はそれから様々の待遇になり、父義朝の事を尋ねると、長田莊司忠致の計略に掛つて、非業の最期を遂げられたとの事であつた。斯くと聞いた頼朝は悲嘆の涙にむせんだ。

「では我れも茲に長居は無用と存じ申すに依り、急ぎこれより東國に參りて、同志を募り、一旗上げすばなりますまい。」と、源家傳來の寶刀、鬚切の太刀を大炊の家に預け、東國に向つて發足に及んだ。

四 夜 叉 御 前 の 投 身

頼朝は道を急いで關ヶ原まで來かゝつた。すると、當時尾張守であつた平頼盛の家人彌平宗清に出逢はうとした。彼は主命を帯びて六波羅に赴いての歸りである。頼朝はこれを避けやうと路傍の藪陰に隠れたのであるが、宗清に舉動不審と怪しまれ、とう／＼逮捕されてしまつた。宗清は捕へて見れば頼朝であつたから、非常に喜んで、直ぐ携へて入浴した。

一方義朝の愛妾延壽が娘夜叉御前は、後にて頼朝が捕はれたと聞いて、

「妾も義朝の子なれば、たとへ女子なればとて、遂に捕はれて殺さるゝことになるでござりませう。せめて兄右兵衛佐殿と同じ場所にて死にたうござりまする。」と、なげき悲しむ。母の延壽や祖母の大炊がいる／＼に慰めすかして、やつと引き留めたが、其後三日目の夜、夜叉御前は密に我家を忍び出で、杭瀬河に身を投じて果てた。時に永暦元年二月十一日、夜叉御前の年僅かに十一歳で

あつた。これを聞くもの、

「武士の子はたとへ幼ない女子供でも、其の心根は雄々しいものである。」と哀れを催さぬはなかつた。別けても延壽の心のうちは推しはかきも涙であつた。淺からぬ情けを受けて居た義朝は、長田忠致の爲めに殺され、せめて心の慰めとして居た娘夜叉御前にも死なれたのである。悲しみ極まつて、

「妾も杭瀬に行つて、娘と同じ流れに身を沈めやう。」

など半狂亂の態なので、大炊は様々に言ひ慰め、死ぬ事だけは思ひ止まらせだが、遂に剃髪して尼となり、亡夫義朝愛子夜叉御前の冥福を祈り、墨染の衣を身にして一生を送つた。

五 頼 朝 の 死 罪

頼朝は入洛の後、宗清の所に居つたが、終に死罪に處せられる事に決した。宗清は心密かに憐憫の情に堪へかね、或日隙を窺つて密かに頼朝に向ひ、

「さて貴殿は、既に死罪に行はるゝ事に決し申した。そして今日中には其の處刑の御沙汰があり、執行になる趣であるが、助からうとは思召さらぬか。」

と、いふ宗清の言葉には眞の同情が籠つて居た。

「私れも今死にたうはなけれども、致方がござらぬ。けれども思へば保元の軍に多くの親身を失ひ、又今度の合戦にて父は撃たれ、兄弟もちりくになりましたのは、よく／＼前世の宿縁が薄いものと見えます。ついでには私れは僧侶となり、皆々の冥福を祈りたう存するに依り、なる事ならば免れたうござる。」

と、眞心こめて云つた。何とかして生命を完うし、同志を募つて源家再興の旗を擧げたいと思つた。かね／＼宗清も惻れに思つて居たので、

「さらば尾張守頼盛殿の母君池の禪尼と仰せらるゝ方は、清盛公には繼母にておはしませど、公も平家一門の方も、禪尼を大切に思召すに依り、此の禪尼に頼んで命請ひをしていただければ、よも助からぬこともござるまい。某が先頃禪尼の許に参りたる折、頼朝が汝の許に居ると聞いたが、まだ十三歳の少年との事、様子はいかが、と禪尼が問はせられたので、年よりは殊の外柔和におはし、殊に禪尼の實子にて、今は故人となられし左馬助家盛殿によく似通ふた顔、眞に見まがふ程にござりますと申し上げたるどころ、いとなつかし氣に思召されたる御氣色でござつた。」と、池の禪尼の慈悲深きを語つた。

「さやうならばいと幸ひでござるが、しかし私には傳手がござらぬ。」

頼朝はうなだれて居る。其の様を見て宗清は益々深く惻れを催した。

「確とは請け兼ね申すが、某よりお話し申し上げて見やう。」と、宗清は仕度を

換へて急き禪尼の館に赴いた。

六 池の禪尼の慈悲

宗清は禪尼の前にひれ伏し謹みて、

「頼朝は死罪に處せらるゝ事に決してござりまする。この事彼に申し聞けたるに、父の後世を弔ひたしと申し居り、如何にも痛はしく侍れば、尼公の御取り計ひにおすがり申したきものに御座りまする。頼朝も禪尼様の御慈悲深き御方なること豫ねてより承り居りましたるものと見え、是非御願ひ呉れとのことにござります。今は禪尼様御一方のみ御頼りにござると申して居りまする。」と云へば禪尼は、

「妾が慈悲者などと誰が頼朝に知らせたるや。故刑部卿忠盛殿御在世の時には

多くの者を申し免したるも、今日はいかゞ侍らんか確とは云へぬ。家盛に能く似通ふたものと聞いては、尙更憫れに思ふに依り、取り計うては見れど、叶はぬかも知れぬ。して何日死罪に執り行はるゝや。」と、禪尼は自分出来るだけ命請ひをしやうと思つた。

「明後十三日に行はるゝことに聞き侍べる。」

「明後日と申せば日數もなし、叶はぬまでも妾より申して見やう。」と、急ぎ駕を重盛の小松邸に枉げさせられた。そして重盛に依りて、頼朝の命を助くることを清盛公へ請はしめたのである。すると清盛公は色を變へて、

「池殿の仰せとあれば、如何なる事も大抵は違ふまいと思へど、この事のみは由々しき大事ぢや。伏見中納言師仲や、越後中将成親の如き輩なれば、何十人何百人生け置きたりとして大事もない。それに義朝の子は幼なけれども、我に取